43029
教科書文庫
4
220
42-1933.
20000
82108

4b
220
B68

文部省檢定濟

新編女子東洋史

及川儀右衛門著

星野書店藏版

資料室

昭和八年二月四日
文部省檢定濟
高等女學校歷史科用

教科書文庫
4
220
42-1933
2000082108

新編女子東洋史

及川儀右衛門
著

広島大学図書
2000082108

星野書店藏版

46
220
B8

例言

一、本書は高等女學校の東洋史教科書として編纂したもので、東洋史の大綱を理解し易からしめるために、支那の形勢を中心として記述したけれど、常に國史との連關に注意し、東洋史上の我が國の位置を明かにすることにつとめた。

二、これまで東洋史は、あまりに範圍がひろく、從つてやゝもすれば煩雜に過ぎて、學習に多くの勞を費さねばならなかつた。著者は多年實際教育の經驗にもとづき、(一)支那の國情及び國民性、(二)朝鮮半島の變遷、(三)これ等と我が國との關係を理解することを以て、東洋史に關する國民的常識であるといふ信念を確立し、從つて本書も記述の中心をこの點に置いた次第である。故に東西の交通も主として近世に於ける國際關係を重視し、特

広島大学
教
82108
図書

に西域及び北狄の記述については、割愛した所が多いから、教授者も學習者も共にこの點に注意して欲しい。

三、年代は皇紀により、また古代を簡にして、割合に近代を詳述した。これも今後の我が國民には、古代よりも近代支那の動きを理解することが重要なりとする著者の見解にもとづくものである。

昭和七年八月

著者識

新編女子東洋史

目次

第一篇　上古……一—一〇

第一章　上代の支那　夏・殷・周の三代……一

第二章　春秋及び戰國の世……五

第三章　孔子……六

上古史大要

第二篇　中古……一一—四三

第四章　秦の統一……一一

第五章　兩漢の興亡……一四

第六章　西域との交通　佛教の東流……一七

第七章　漢代の文化……二一

第八章　三國　晉の統一　南北朝……二四
第九章　隋の統一　唐の興起……二九
第十章　唐の外國經略とその衰亡……三三
第十一章　唐代の文化……三六

中古史大要

第三篇　近古……四三—七〇
第十二章　五代　宋の統一　遼・金の興亡……四三
第十三章　蒙古の勃興　宋の滅亡……四九
第十四章　元の衰亡　明の統一……五五
第十五章　明の衰運……五九
第十六章　ポルトガル・オランダ等の東洋經略……六三
第十七章　元・明の文化……六五

近古史大要

第四篇　近世……七一—八九
第十八章　清の興起　聖祖・高宗……七一
第十九章　阿片戰爭　長髮賊　英・佛聯合軍の支那侵入……七八
第二十章　ロシヤの東方經略と清・露の交渉　フランスの印度支那經營……八五

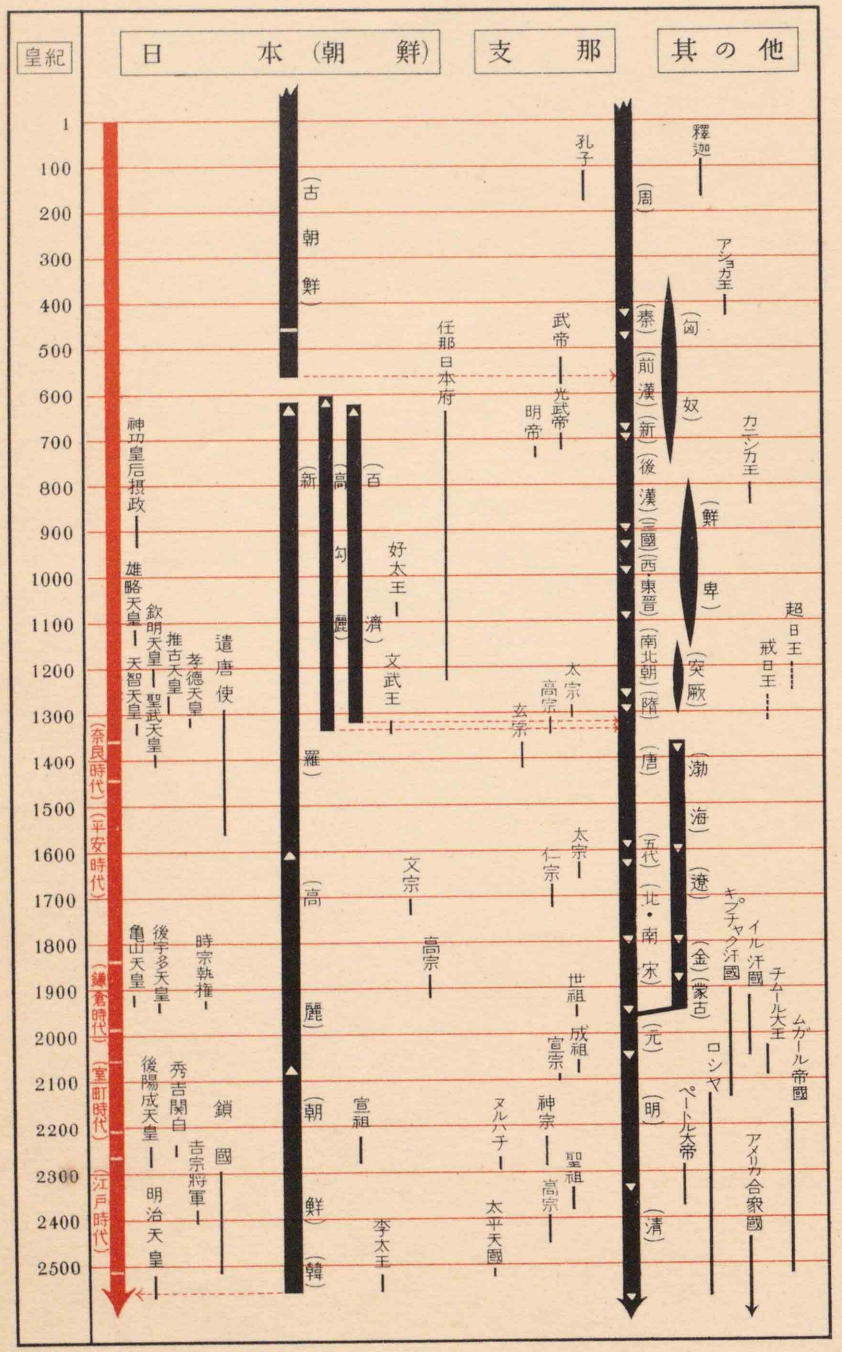
近世史大要

第五篇　現代……九〇—一〇五
第二十一章　清國と我が國……九〇
第二十二章　清國と歐米列强との關係　清國の革新……九三
第二十三章　中華民國……九八

現代史大要

新編女子東洋史　目次終

東洋史對照年代表



（コヽカラ切取リ琴代用トス）

新編女子東洋史

及川儀右衞門著

第一篇　上古

第一章　上代の支那　夏・殷(イン)・周の三代

支那と東洋史・國史

東洋史　東洋史とは、東洋諸國の盛衰興亡や、文化の發達などに關する歷史である。特に支那は、これ等諸國の中心をなし、古來我が國との關係も深いから、その歷史を學ぶことは、やがて東洋全般の歷史に通じ、また國史を明かにする手近い道である。

漢族

支那文化の始　支那文化を開いた漢(カン)族は、今から凡そ五千年前、

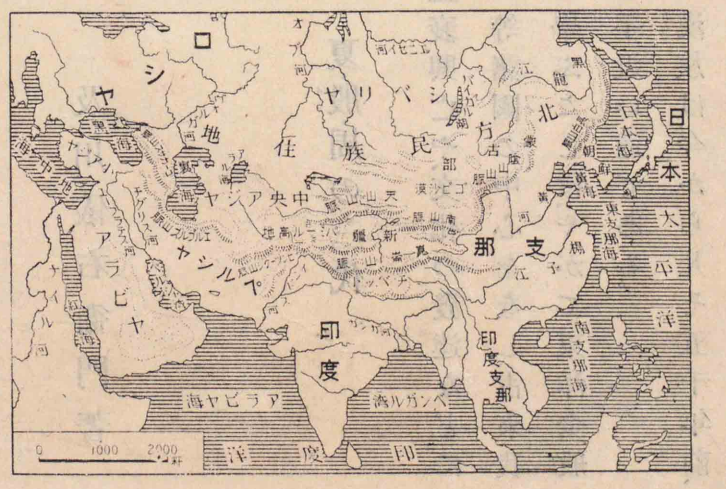
アジヤ洲要圖

黃帝

堯・舜

堯・禹の像　山東省にある後漢時代の石刻書によるもの、箒をかぶりて鋤を手にして居るのは固で上古の質素な風俗を想像することができる

多くの部落をなして、黃河の流域に散居し、その長のうち勢力あるものは、諸部落を統一して天子となつた。支那の開祖と傳へられる黃帝は、實にかゝる統一の基を開いたものである。その後に堯・舜などの天子が位につき、よく民を愛し、後の世までも理想的聖天子と仰がれて居る。この頃漢族は、舟車をつくり、文字・曆法を發明するなど、黃河の流域は、世界文明の一源泉をなした。



夏

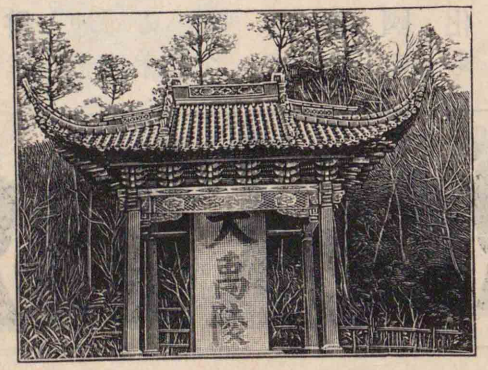
禹王の陵　浙江省紹興の會稽山にある

殷

周

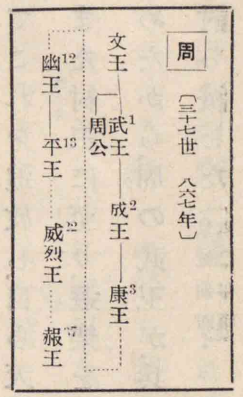
支那の國體

夏・殷の世　禹は舜につかへ、その禪をうけて天子となつたが、國號を夏といひ、始めて王位世襲の基を開き、これから天子の位は、子孫相傳へることゝなつた。然るに桀王の時、政治がみだれたので、殷の湯王が出てこれを追放し、自ら天子となつたが、殷もまた紂王に至り、遊樂を事として民を苦しめたから、周の武王が、兵をひきゐてこれを討ち滅した（皇紀前四六〇年頃）。かくの如く支那は、その王朝がたびたびかはり、これを革命と稱したが、勢力・德望ある英雄は、或は前の天子から禪をうけて王位につき（禪讓）、或は討つてこれに代つた（放伐）。故に一たび勢力を得れば、風雲に乘じて天子となるが、苦しこれを失



へば民も亦そむいて、深くかへりみなかつた。これ支那國體の特色である。

周の盛世　周の武王は、今の西安(陝西)に都し、一族功臣を封じて諸侯とし、公・侯・伯・子・男の五爵に分ち、それ〴〵の領地を治めしめた。武王の弟周公は、幼主成王をたすけて、文物制度をとゝのへ、今の洛陽(河南)に東都をいとなみ、大いに建國の基を固くし、その文化も頗る發達した。即ち官



官	長	職掌
天官	冢宰(チョウサイ)	庶政總理・財政
地官	大司徒	民政・教育
春官	大宗伯	祭祀・禮儀
夏官	大司馬	軍事
秋官	大司寇	刑獄
冬官	大司空	産業・土木

武王

周公成王を輔く

後漢時代の石刻畫、山東省にある、中央臺上が成王、その向つて左方膝を屈するは周公である

周公

周の文化

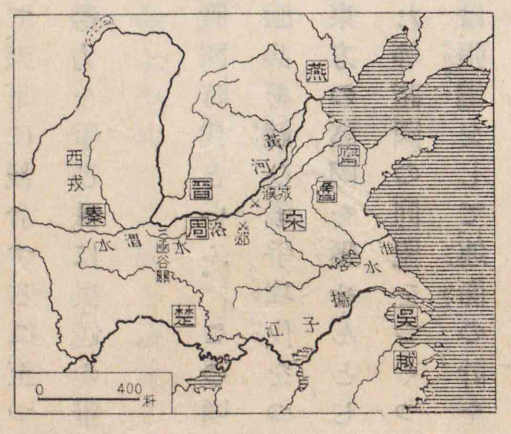
制を定めて政務をつかさどらしめ、また學制をとゝのへ、大學・小學などの學校を設けた。そして日用の小事から、修身・治國の道を教へて、國家有用の人物を養成することにつとめた。故に人文大いに開け、支那文化の基礎が確立した。

第二章　春秋及び戰國の世

春秋時代　周は平王の時夷狄(イテキ)に追はれて、東都洛陽にうつつた。これを周の東遷(トウセン)といひ、この後約三百年間を春秋(シュンジウ)時代といふ。この頃漢族は、人口漸く增加し、黃河流域から次第にひろがつて、四方の異民族と相接したけれど、内は周の王室が衰へて、その威令が行はれなかつた。

[春秋時代要圖]

周衰ふ



こゝに於て強大な諸侯が、周王にかはつて、天下に號令するに至つた。これを覇者といひ、晉・楚などは、互に勢力を爭ひ、殊に吳・越の爭の如きは、早く我が國にも知られた。

覇者

戰國時代　春秋の後凡そ二百年間を、戰國時代といふ。この頃周は全く衰へて、諸侯みな王と稱し、富國强兵を競ひ、戰爭攻伐をつゞけた。中にも西方の秦は、勢最も强く、東方の諸國を壓せんとしたから、蘇秦なるもの、合從の策を立て、これ等諸國の同盟をつくつて、秦に當らしめた。けれどもその後秦は、張儀をして、連衡の計を行はしめたので、諸國互に相疑ひ、秦と和した。これから東方の諸國は、その方針が一定せず、秦はこれに乘じて、しきりに諸國を併せ、つひに天下を統一することゝなつた。

富國强兵
秦の富强
合從・連衡

第三章　孔子

學術の發達　周は學校を設けて、教育をすゝめたが、春秋・戰國の世となるや、諸國が相競うて人材を用ひたから、才藝あるものは、立身成功の道が開かれ、また世がみだれ、言論が自由になつたので、國を治め民を救はうとして、說を立つるもの多く、學者・論客が相ついで輩出した。これ我が戰國時代と異なるところで、中にも孔子は、學德ともに高く、後の世に至るまで深い感化を及ぼし、その手に開かれたのが儒教である。

時勢と學術

孔子の像　山東省曲阜の孔子廟内の碑に刻まれたもの、唐の吳道玄の筆と傳へられ聖像として名高いものである

孔子　孔子名は丘、字は仲尼といひ、春秋時代の末に魯(山東)の昌平鄉に生れた(皇紀一〇九年、綏靖天皇の御代)。初め魯につかへて政をとり、後職をやめて諸國を遊說したけれど、志を得なかつたので、晚年には教育と著書とに全力を注いだ。易・書・詩・春秋・禮記などのいはゆる五經は、その修め定めたも

五經・論語

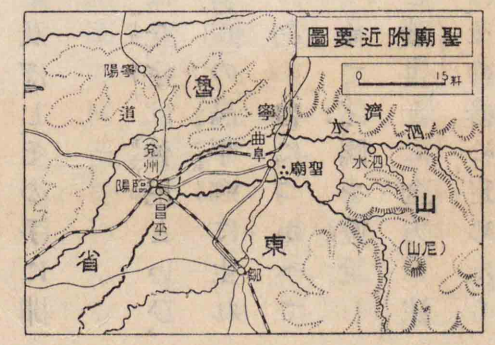
聖廟附近要圖

儒教の根本

孟子

ので、また孔子の遺教をあつめた書を論語といふ。その弟子は三千人と傳へられるが、彼は學德が高く、意志もつよく、道のためには身命ををしまなかつた。

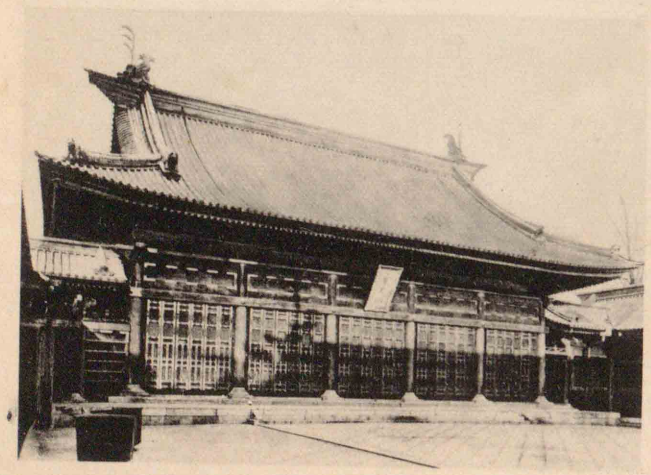
儒教　孔子の教は、儒教ともいふ。その說く所は、家族相親しむ孝悌を本とし、これをひろめて、人々互に相和する仁に至るべく、仁は身を修め、國に平和をもたらす根本の德であるといふので、君臣の名分を正し、みだれた世を治めて、周の盛時にかへさうとするものであつた。その後戰國の頃、孟子が出で、儒教は更に發展した。孟子は、幼い時から賢明な母の教育をうけ、性善說をとなへ、仁義を重んじた。故に孔子と並び稱せられ、儒教は一に孔孟の教ともいひ、後久しく支那に於ける政教の基とな



聖廟

支那山東省曲阜にある聖廟の大成殿で孔子廟の本殿である。

朝鮮京城にある經學院の大成殿で孔子をまつる。



東京市湯島にあつた聖堂の大成殿で關東大震火災により滅失した。

孟母斷機　　中村不折筆

儒教の東傳

つた。かく儒教の發展にともなひ、孔子をまつる聖廟（文廟）が建てられ、その祭も行はれることゝなり、更に遠く朝鮮半島を經て、我が國にも傳へられた。即ち應神天皇の御代、百濟の王仁は、論語等の書をもたらし、初めて我が國に儒教を傳へたが、その後學者や書物が相ついで渡來し、頗る上下に歡迎せられ、道德・政教の發達をたすけることが多かつた。

老莊の學

諸學派

諸子百家　戰國の世には、儒教に反對した學說も多かつた。楚の老子は、儒教がとかく束縛に傾くのに反對し、仁義をしりぞけ、すべて自然に任せておけば、天下が治まることを說き、莊子がこれをうけついだ。この一派を、道學または老莊の學といふ。後世の道教は、この派の說にこじつけて起つたものである。この外いろいろな學派が竝び起り、これ等を總稱して諸子百家といふ。後に支那に行はれた各種の思想は、みなこれを源として發展した。

上古史大要

上古史は、太古から秦の統一に至るまでをいひ、我が孝靈天皇以前に當る。この期の初め、黃河の流域に散居した漢族は、次第に統一の氣運に向ひ、周圍の異民族を從へ、支那文明の基を開いた。その間黃帝から堯・舜の世を經て、夏・殷・周三代に至り、政治の發達・文化の進歩頗る見るべきものがあり、周末に起つた儒教の如きは、永く東洋に於ける政教の標準となつた。要するに上古は、漢族發展の時代であつた。

第二篇　中古

第四章　秦の統一

秦の統一

郡縣の制

集權・法治の政治

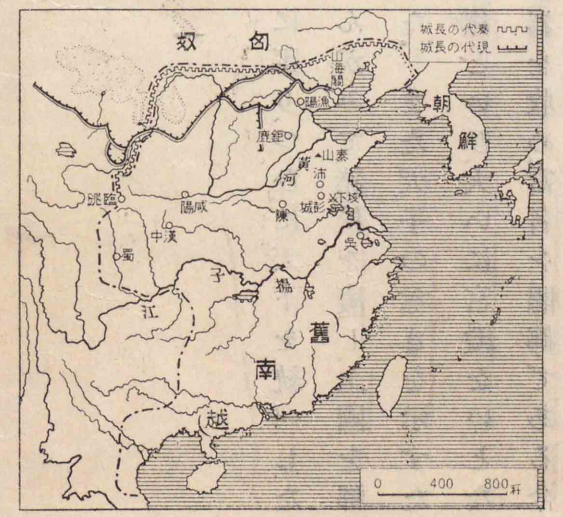
始皇帝の集權政治　秦は始皇帝に至り、つひに天下を統一したが（皇紀四四〇年、孝靈天皇の御代）、戰國時代の弊にかんがみて、諸侯を廢し、全國を郡縣に分ち、天子が直接にこれを治めた。また天子の尊さを示すために皇帝と號し、その命令を詔（シヨウ）、印を璽（ジ）といひ、大いに宮殿をいとなみ、屢々國內を巡遊し、更に民間の兵器を收め、富者を國都である今の西安にうつし、以て戰亂の源をふさぎ、專ら集權政治の歩を進めた。けれどもその法治主義は、やゝ極端に走り、人民はかへつて新政を厭ひ、學者も古制をたゝへて、始皇帝の改革にとかくの評が絕えなかつた。こゝに於て帝は、丞相李斯（リシ）の言を用ひ、醫藥・農業等に

民論の壓迫

匈奴

關するものゝ外、民間の古書を燒きすて、ついで書生四百餘人を坑に埋めて殺し、異論を壓して、統一を進めようとした。

漢族の發展　春秋・戰國以來、漢族は次第に發展したが、內部の不統一のため、やゝもすれば異民族の侵入をうけることゝなつた。殊に今の蒙古に居た匈奴（蒙古族の祖先）は、その勢最も强く、たびたび北方の諸國を侵した。秦の始皇帝は、蒙恬をして、これを擊退せしめ、北邊に萬里の長城を築いて、その侵入を防ぎ、また今の安南地方をも從へ、漢族をこの方面に移住させた。されば漢族は大いに發展して、秦の威名は遠近にとゞろくに



萬里長城要圖

支那の國名

萬里の長城

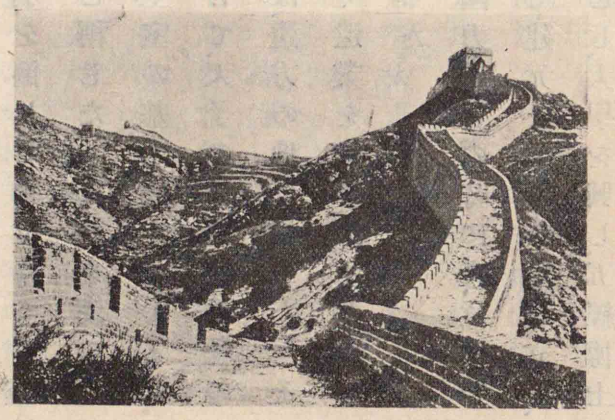
北平の北方八達嶺附近長城の現狀、漢代以後に次第に改造修築を加へたものである

項羽・劉邦

至つた。現今諸外國の間に、ひろく用ひられて居る支那といふ國名は、秦の名から轉じたチナにもとづくものと考へられて居る。

秦の滅亡　始皇帝死し、暗愚な二世皇帝その後をつぐや、ひそかに機をねらつて居た亡國の遺臣は、兵をあげて四方に起つた。中にも江東（蘇江）から起つた項羽と、沛（蘇江）から起つた劉邦とは、最も有力な英雄であつた。そして劉邦が項羽にさきだち、國都西安に迫るや、秦王は出でゝ降り、秦は三世、十五年で亡び（皇紀四五五年、孝元天皇の御代）、その遺民は、後に我が國に歸化した。

秦
始皇帝 —1— 二世皇帝 —2— □ —3— 子嬰（三世　一五年）



漢（前漢）

漢の高祖の像　元代の石刻畫による、廬山にあり

文景の治

年號の始

第五章　兩漢の興亡

漢の高祖　劉邦は一平民から身を起し、秦の法を改めて民心を收め、蕭何・張良・韓信などを用ひ、つひに項羽を倒して帝位につき（皇紀四五九年、孝元天皇の御代）、長安（今の西安）に都し、國號を漢（前漢）と稱した。これを漢の高祖といふ。そして王室の基を固くせんとし、周・秦の制度を併用して、天子の領地は郡縣の制をとり、一族功臣は、遠方の地に封じた。その子文帝・孫景帝よく遺業を守り、天下平かに財政もゆたかになつた。

武帝の功業　武帝は、英明の資を以て、國力充實の時に帝位につき、內政・外交ともに大いに振つた。始めて建元といふ年號を立て、また儒教を以て、國民の思想を統一せんとし、大學を興し、五經博士

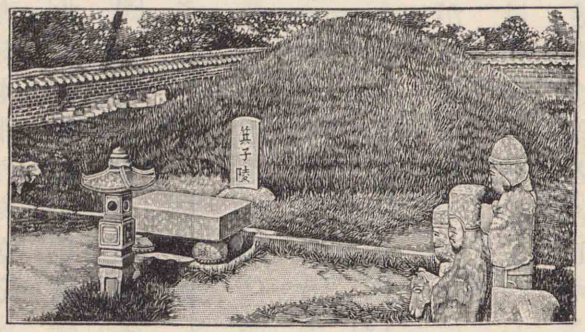
儒教の興隆

張騫と西域

箕子陵　平壤北方の高地乙密臺の附近にある

朝鮮の征服

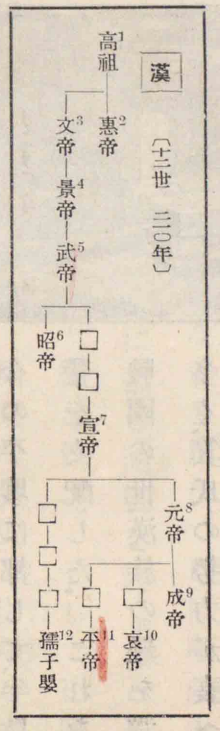
を置いたので、儒教は恰も支那の國教のやうになつた。この頃北方の匈奴が、また勢を復し、しきりに漢を侵した。そこで武帝は張騫といふ探險家を西域（今の中央アジヤ）に遣し、大月氏と結んで、夷を以て夷を制せんとはかり、且つ大軍をやり、匈奴を討つて、今の內蒙古をとつた。



これよりさき殷の王族箕子は、朝鮮に來り今の平壤に都して、半島の北部から南滿洲一帶を支配した。これを古朝鮮といふ。春秋・戰國の世、漢族の難を避けて朝鮮に來るもの多く、箕氏の勢力が衰へたのに乘じ、燕の衛滿といふもの、つひに箕氏にかはり、朝鮮王となつた（皇紀四六七年、孝元天皇の御代）。武帝に至り、衛氏を征して朝鮮を服し（皇紀五五三年、開化天皇の御代）、また今の安南地

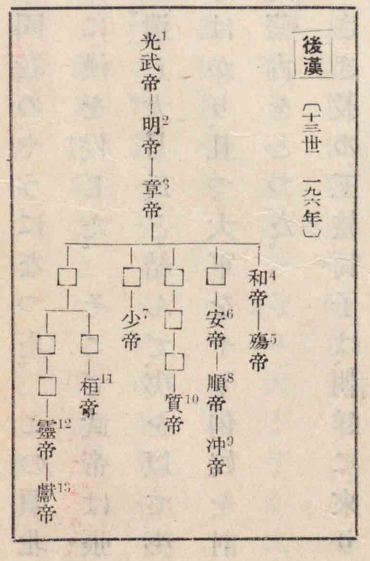
漢威の發展

方をも平げたから、漢の勢力は、東は朝鮮から西は天山の南に及び、北は内蒙古から南は安南に達し、漢土・漢族の名は、いつしか支那の國土・人民をさす別名となつた。



新

が次第に衰へ、つひに外戚王莽は、平帝を弑して、自ら帝位につき、國を新と號した。この時に當り、漢の王族劉秀（景帝の遠孫）は、兵を起し、王莽を滅して帝位につき、都を洛陽に定めて、漢を再興



後漢の光武帝　漢は武帝の後宣帝が、中興の英主と稱せられたけれど、その後國勢

後漢

前漢と西域

後漢と西域

した（皇紀六八五年、垂仁天皇の御代）。これを後漢の光武帝といふ。帝は意を内治に用ひ、學問をはげまし、士風の養成に力をつくし、つとめて兵戰を避けて、民力の休養をはかつた。子明帝・孫章帝よくその遺業を守り、後漢の極盛時代をあらはした。

第六章　西域との交通　佛教の東流

兩漢と西域　漢の武帝が、張騫をつかはしてから、西域諸國との交通が開け、葡萄・胡麻・胡瓜・孔雀などを初め、西域の物産や文化が支那に傳はり、支那の絹も西方に輸出せられた。後漢に至り、匈奴がまた西域に威を振つたので、明帝は、智勇兼備な班超をやつて、西域諸國の經略に從はしめたが、彼はこれを討つて、今の裏海附近に追ひ、よく西域諸國を手なづけた。この頃、ヨーロッパのローマ帝國は、西部アジヤ地方をも領有し、漢と對立する世界の二大先進國で

佛誕　下村觀山筆

大秦國との交通

あつた。漢ではこれを大秦國といひ、班超はこれと交通を開かうとして果さなかつたけれど、桓帝の時、大秦の使者が、海路今の東京に來たので、兩國の交通これより開け、支那の絹は、ローマ人の間に頗る珍重せられた。

アーリヤ種族

古代の印度　印度は、支那と共に東洋文明の發源地である。今から約四千年前、アーリヤ種族の一派が、中央アジヤから南下して印度に入り、土人を征服してこれを奴隷とし、印度北半部を占めた。

階級制度

そしてこの種族の社會は、僧族・王族・平民などの階級制度が嚴重で、特に僧族が最も重んぜられたから、制度・文物をその手に私し、バラモン教を本として、他の階級を壓迫し、漸く專横に流れた。この時に當り、宗教を革新し、世を救はうとしたのは、釋迦である。

バラモン教

釋迦　釋迦は、我が綏靖天皇の御代（皇紀九八年頃）中印度に生れた王族である。年長ずるや、深く人生・社會の問題に思をひそめ、つひに出

佛教

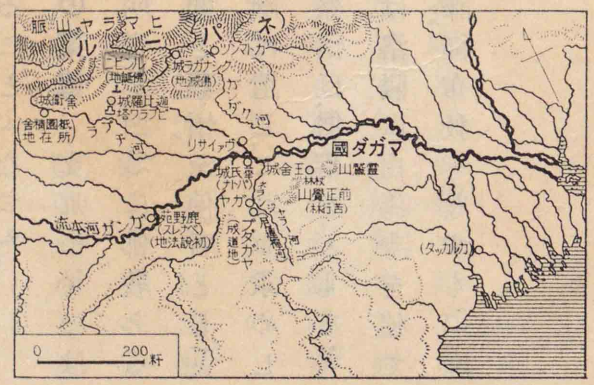
ガンガ河流域要圖

アショカ王

カニシカ王

家して修業をかさね、佛教を開いてその布教に從事した。釋迦は、バラモン教に反對して、一切人類の平等を唱へ、人は私利のためこの世に於て苦痛を招くのであるから、何人でも私欲を斷ち、慈悲の心を以て、正しい道を行へば、みな佛となり、極樂の安心境に達し得べきことを說いた。されば僧族の專横に反感をもつ人々は、喜んで佛教信者となり、印度以外の國々にもひろまつた。

釋迦滅後の佛教　釋迦の死後二百餘年を經て、中印度のマガダ國にアショカ王（孝靈天皇と同時代）出で、更にその後約三百年にして、大月氏國にカニシカ王（垂仁天皇と同時代）があらはれ、共にあつく佛教を信じて、その保護・布教に力をつくした。殊に大月氏



ガンダーラ美術

國は、インダス(印度)河上流ガンダーラ地方に位し、ギリシヤの影響をうけて、佛教美術の花が開いた。かくて佛教は、東はバルマから西はシリヤに至り、南はセイロン島から北は中央アジヤに至るまで、ひろく弘布せられ、やがて支那にも傳はることゝなつた。

ガンダーラの佛像　菩薩立像でフランスのルーヴル美術館に保存せらるゝ、やゝ柔かみを缺くも全體の釣合よくも最も代表的なものゝ一つである

蔡愔

佛教の東傳　支那に於ては後漢の明帝が、西域に佛教あることを聞き、蔡愔を使者として、大月氏國に遣し、これを求めしめた。蔡愔は、僧侶をともなひ、佛像・經文をもたらして歸國したので、明帝は洛陽に白馬寺を建てた。さればこの後外國僧侶の支那に來り、譯經・布教をなすもの漸く多きを加へた。

訓詁の學風

修史

字體

第七章　漢代の文化

儒教・文學　前漢の武帝が儒學を興すや、學者・文人が相ついでまらはれたが、儒學に於ては主として古書の文義・字句を解釋する訓詁の學風が盛に行はれた。殊に後漢の鄭玄は、支那第一の訓詁學者と仰がれて居る。また前漢の司馬遷は、史記を著して、支那の上古から武帝に至るまでの歷史をのべ、後漢の班固及びその妹班昭は漢書をつくり、前漢の歷史を明かにした。この二書は、文章もよく、史書としての體裁もとゝのひ、後世支那及び我が國に於ける修史の模範となつた。

漢字の發達　支那の文字は、古く發明せられたが、時代の經過につれ、その形が變化して簡明となり、字體も統一せられた。その最も古いものを古文といひ、周以後略せられて篆書・隸書となり、漢代

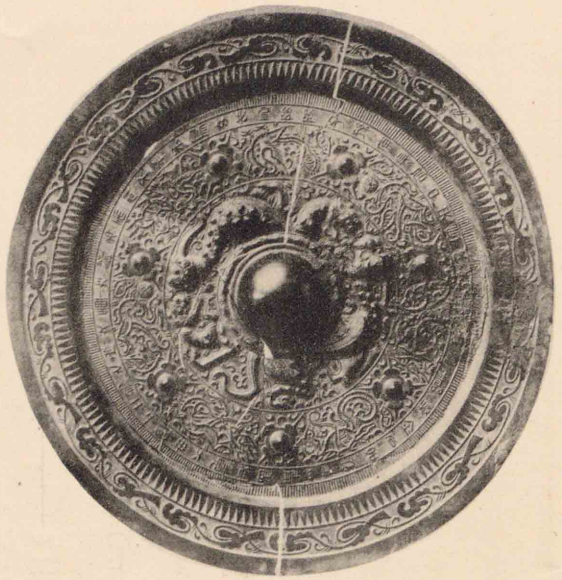
に更に略して楷書・行書・草書などがつくられた。そして漆を以て、竹片・木の札・布などに書き、韋を以てこれを編み、卷いて書物とした。書物をかぞへるのに、卷・編といふのは、これがためである。然るに秦代に筆がつくられ、後漢に至り、蔡倫が製紙の法を發明したから、書物の體裁もおのづからかはつた。

字體の變遷　古文から次第に略せられて行く樣を示したものである

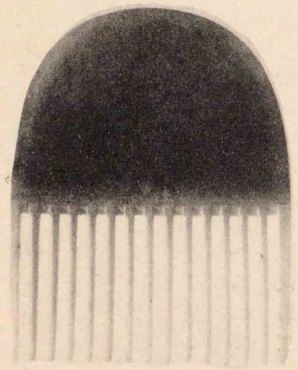
古文	篆書	隸書	楷書	行書	草書
上	上	上	上	上	上
下	下	下	下	下	下
左	左	左	左	左	左
右	右	右	右	右	右
日	日	日	日	日	日
月	月	月	月	月	月
山	山	山	山	山	山
水	水	水	水	水	水

道教

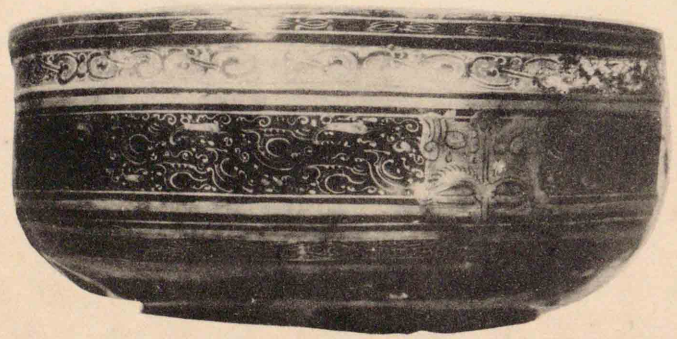
漢初には、儒教よりも道家の説がよろこばれたが、後漢に至り、佛教が輸入せられると共に、これに刺戟せられて、道教が起された。道教は支那古來の民間の信仰に老莊の説を加味し、主として長生して幸福を得んとするもので、後漢の末に、張良の後と稱する張道陵といふものゝ手に開かれた。そして祈禱・療病などの事



七乳龍虎鏡



櫛甲鼈



漆畫大椀

漢の武帝は、古朝鮮を征服し、四郡を置いたが、中にも樂浪郡は、我が仁德天皇の御代に至るまで、凡そ四百二十年間にもわたり、最も長く支那の勢力範圍として遺つた。從つて漢時代の發達した文化がこゝに傳へられて、周圍の民族に幾多の感化を及ぼした。郡を治める役所は、平壤の對岸なる大同江の下流にあつたもので、附近に散在する古墳から、多數の工藝品が發掘せられた。七乳龍虎鏡は中央に素鈕をつくり、左右對向せる大きな龍虎を刻し、その外側に七乳を配して、それ等の間に神人瑞獸をあらはし、更に文字で銘を刻して居る。銅鏡中の白眉ともいふべき精巧なもので、後漢時代中期以前の製作と考へられる。鼈甲櫛は婦人用のもので、技巧精美、玉石器類の製作と共に周代から大なる發達をなし、漆畫大椀は直徑二四糎餘高さ一〇糎に及び、外側は黑漆の地に朱黃、青の彩漆を以て雲氣鳥獸文などをめぐらし、內側は朱塗で、優麗な文樣や技巧は、今日でも容易に及ぶことのできないものがある。

三國（朝鮮）

漢委奴國王印

福岡縣博多灣の志賀島で發掘せられたもの、方二・四糎位、この附近の土豪のもので漢の倭の奴（難）の國王の印である

任那日本府

學問技藝の傳來

日支の交通

を行ひ、次第に民間にひろまつた。

漢の文化と我が國　この外漢代には、銅鏡・織物・漆器などの製作の技が進み、今の平壤附近の樂浪等を初めとして、朝鮮半島にも傳はつた。初め半島の南部は、小邦分立の有樣であつたが、漢の勢力が衰へると、北方に高句麗が起り、南部にも新羅・百濟などが起つた。そして小國任那が、隣國の新羅に攻められて大いに苦しみ、我が國に援を求めて來たので、垂仁天皇は、これを保護して日本府の基を開かれ、ついで、神功皇后は、新羅御親征を行はせられた。從つてこの間に、漢に於て發達した學問技藝が、我が國にも傳はつて來た。

應神天皇の御代に、百濟から來朝して、論語・千字文を獻じた王仁は、漢の高祖の子孫で、そのほか機織・裁縫などの工女も多く渡來し、文

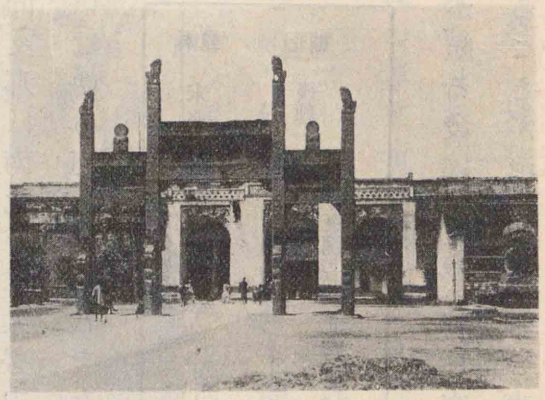
物工藝の發達をたすけた。また我が國民も支那に渡航し、後漢の光武帝の時、邦人で王印を授けられたものもあるが、支那では、我が國を倭と稱した。

第八章　三國　晉の統一　南北朝

三國の分立　後漢は、和帝以後天子が概ね幼弱で、外戚・宦官が政をみだり、つひに群雄が四方に亂を起すに至つた。中にも曹操・孫權・劉備の三人が、最も有名である。曹操は、後漢につかへて、北支那を平定し、孫權・劉備は、揚子江流域を保ち、同盟して曹操の軍を赤壁(湖北)に破つた。ついで曹操の子曹丕は、後漢を滅して帝位につき、洛陽に都して、國號を魏と稱した。前漢・後漢を合せて、凡そ四百年で亡んだ。ついで劉備も帝となり、成都(四川)に都して、國を蜀といひ、諸葛孔明を用ひ、漢の回復をはかり、孫權も今の南京(蘇江)に都して、國を

群雄起る

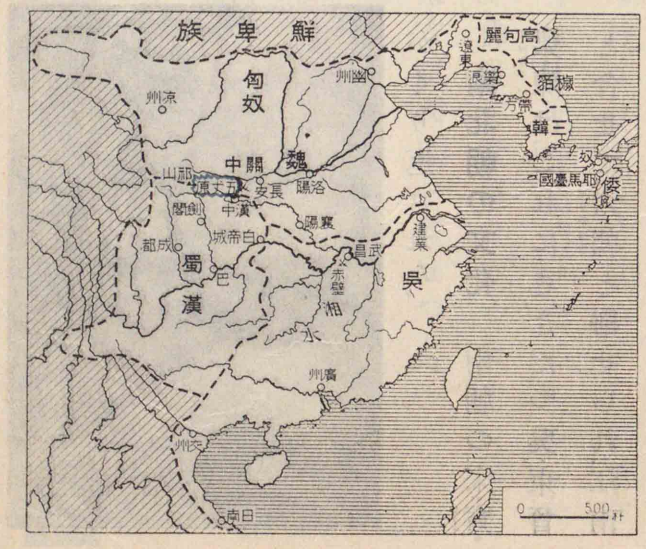
魏



蜀の城門　古の蜀の王城であつた今の四川省成都の城門である

西晉の統一

南北朝の對立　西晉は國勢振はず、國内とかく安定を缺いたので、その間に異民族が侵入して、黄河の流域を占領し、西晉はためにこれを西晉といふ。



三國分立要圖

吳と稱し、三國分立して、互に攻爭をつゞけた。其後、魏は蜀を滅したが、魏の權臣司馬氏がつひに主家を倒し、更に吳を併せて天下を統一した。

丞相祠堂 成都にあり諸葛孔明をまつる、唐の杜甫が錦官城外柏森々と吟じたのはこゝである

東晉

南北朝の對立

滅び、その王族が江南に逃れ、今の南京に都して東晉と稱したが、東晉も間もなく宋に滅された（皇紀一〇八〇年、元恭天皇の御代）。その後凡そ百五十年間、支那は南北の二大勢力に分れ、いはゆる南北朝時代をなし、爭亂がくり返された。

南朝	北朝
宋 八代 六〇年	後魏 一三代 一三七年
齊 七代 二四年	東魏 一代 一七年
梁 四代 五六年	西魏 四代 二四年
陳 五代 三二年	北齊 五代 二八年
隋	北周 五代 二五年

南北朝の文化 南朝の宋・齊・梁・陳は、これにさきだつ吳・東晉と合せて、六朝と稱せられ、江南の文化が開けて、文學・藝術などが頗る發達した。特に文學は、形をとゝのへ、美しい字句をならべることが流行し、東晉の末に出た陶淵明が、詩人として最も名高い。

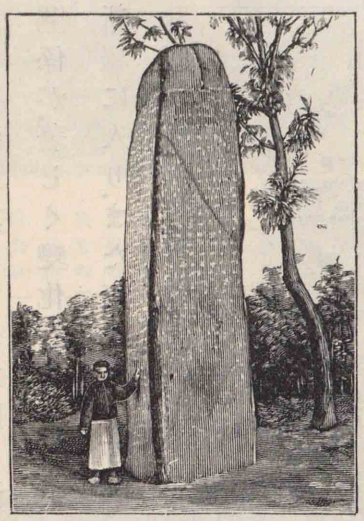
文學

佛教

高句麗・新羅の勃興

好太王の碑 高句麗第十九代の英主好太王の功績を記した碑で今滿洲の輯安縣にある、その一部に倭が辛卯年（皇紀一〇五一年）海を渡り百濟、新羅を破り臣從せしめたことが刻まれてある

一般に佛教は頗る盛んで、梁の武帝は、深くこれを信奉し、多くの寺院を立て、印度からは達磨が來て、禪宗を傳へた。北朝に於ても後魏の孝文帝は、漢族の文物を慕ひ、言語・風俗に至るまで、漢化主義をとつた位であるから、佛教も盛んに行はれ、印度にならつて石窟寺を開き、佛教美術の花も開いたが、今は大同（西山）、龍門（南河）などに、わづかにその面影をとゞめて居る。かく佛教が隆盛を極めたから、更に東方諸國にも傳はつた。



東方諸國の佛教 朝鮮半島の高句麗は、わが仁德天皇の頃から、好太王・長壽王などの英主が相ついであらはれ、平壤に都をさだめ

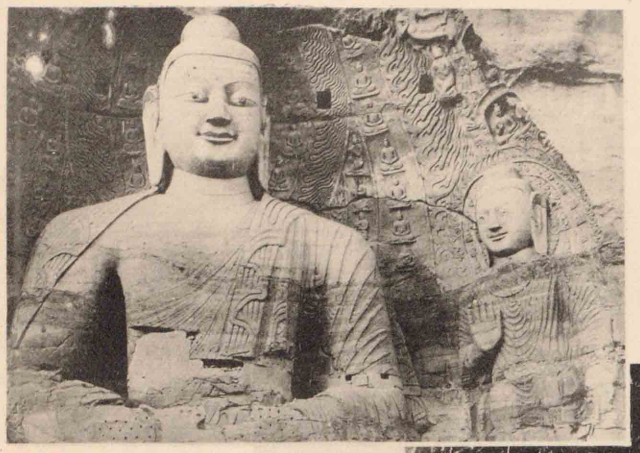
て（皇紀一〇八七年、允恭天皇の御代）、屢〻百濟を侵した。その後新羅にも英主眞興王が出で、任那を攻めて日本府を滅し（皇紀一二二二年、欽明天皇の御代）、半島に於ける勢力關係が、著しく變化した。かゝる間に佛教は、北朝を通じて高句麗・新羅に入り、また東晉から百濟に傳はつた。百濟がこれを我が國に傳へたのは、欽明天皇の御代で、その國運が漸く傾き、專ら我が援を得て、これを回復せんとする時であつた。かくて佛教藝術の發達も著

朝鮮半島要圖

佛教の東傳

佛國寺（下）

新羅の都であつた慶州附近にあつて寺傳によれば新羅法興王が創立し更に我が孝謙天皇の御代に景德王が再建したものである、圖はその正門に當るもので下の階段を白雲橋、上の階段を青雲橋といひそなの上が紫霞門で奇巧な構造は支那、朝鮮にも他に例がないものである



雲崗　石窟釋迦三尊

雲崗の釋迦三尊は、後魏文成帝の時代（我が雄略天皇の御代）につくられたもので、支那本土最初の石窟佛である。本尊は全高一三・六米强、釣合よく規模雄大である。

龍門　盧舍那佛

盧舍那佛は唐の高宗の時に作られ、本尊は高さ一〇米を超え、顏容や姿勢堂々として雄麗支那彫像中古今を通じて第一の傑作と稱せられる。

奈良縣　藥師寺藥師如來三尊

藥師如來三尊は、持統天皇の御代にできあつたもので、初唐の樣式を輸入し我が國で醇熟し、流麗圓滿世界鑄銅品中の傑作である。

しく、新羅の都であつた慶州附近や、我が法隆寺などには、多くのすぐれた遺物を傳へて居る。

第九章　隋の統一　唐の興起

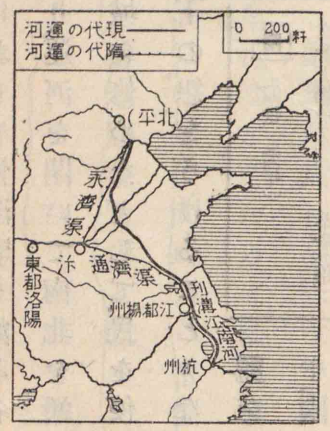
文帝の統一

隋の統一　北朝の諸國は、風俗が粗野であつたけれど、その武強の精神を以て、とかく文弱に流れ易い南朝を壓した。そしてつひに北方の勢力を基礎として、楊堅といふ漢人が、南北を統一し、長安に都して、隋の文帝と稱した。文帝は、よく中央集權の實をあげ、長い間の爭亂を治めて、民力を休養し、諸制度をとゝのへた。

煬帝の經略

次の煬帝は、漢の武帝にならひ、頻に外國經略に志し、北方の突厥を服し、また今の安南・臺灣をも從へた。

隋代運河要圖



けれども性豪奢を好み、各地に離宮をつくり、運河を開いて南北を通じ、また北邊の長城を修めなどして、民を使ふこと甚しく、天下の怨をうけることゝなつた。殊に高句麗を討つて失敗するや、國内の動亂を招き、つひに臣下のために弑せられた。我が聖德太子が、小野妹子を遣して、支那と國交を開かれたのは、實に煬帝の時であつた。

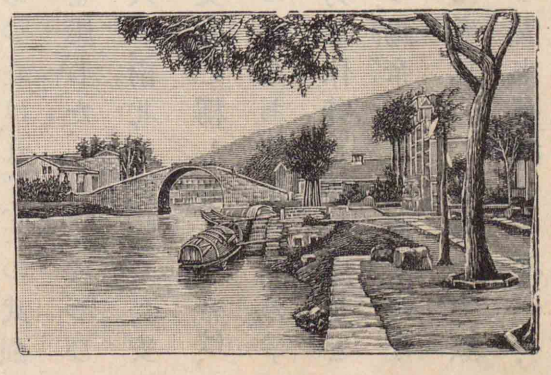
現時の運河　江蘇省内のもの眼鏡橋、民船など特色ある趣を呈する

聖德太子と隋

唐

隋（四世　三九年）
文帝[1]—煬帝[2]—□—恭帝[3]（侑）
　　└恭帝[4]（侗）

唐の太宗及び高宗　隋末に李淵は、その子世民と共に、兵を今の山西省に起し、進んで長安を陷れて帝位についた（皇紀一二七八年。推古天皇の御代）。これを唐の高祖といふ。ついで世民位につき太宗[2]といひ、稀に見る英明の資をもつて、よく文武の名臣を用ひ、天下平かに國威あがり、世に貞觀の治といふ。太宗の子高宗の時代も、名臣なほ存して、よくこれをたすけ、兩帝の治世約六十年間は、唐の極盛時代で、内は文化の花が開き、外は異民族を服して、漢族空前の大發展をなし、當時の世界に於ける一先進國となつた。



貞觀の治

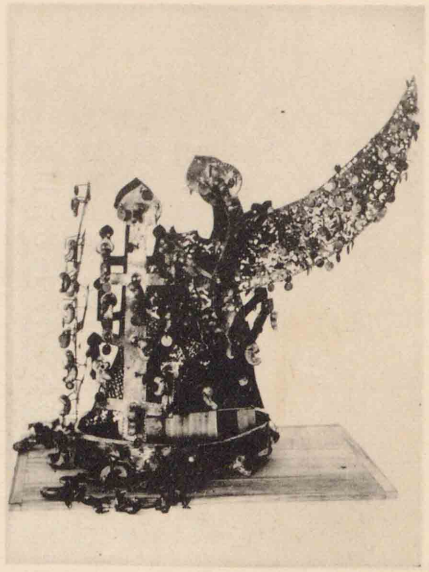
唐の太宗の像　元代の石刻、廬山の君臣像による

則天武后像　廬山石刻、君臣像の拓本による

周

則天武后　高宗は多病で、皇后武氏に政治を行はせたから、政權は自然にその手に歸し、高宗の死後、武氏自ら帝位にのぼり、則天武后と稱し、國號を周と改めた。武后は權略あり、よく人を用ひて、國威を維持したが、間もなく中宗[4]が唐室を復することゝなつた。

石造釋迦如來



金冠

聖德王陵

突厥

チベット

滿洲・朝鮮

大唐平百濟國碑塔

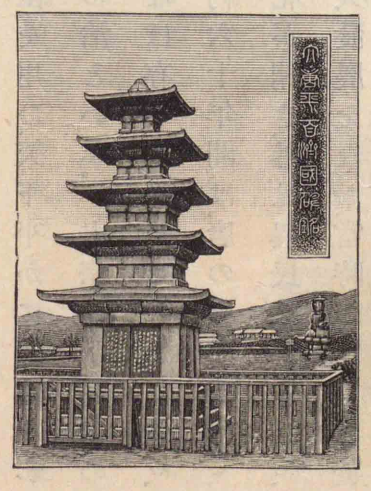
唐の高宗の時百濟を滅したる記念としてその都である今の忠清南道扶餘に建てた石塔で碑文を刻す

安東都護府

第十章　唐の外國經略とその衰亡

唐の外國經略

太宗・高宗の時代には、唐の國威頗る振ひ、對外經略も頻に行はれた。突厥は、アルタイ山附近から起り、今の蒙古・新疆・中央アジヤを支配し、唐にも屢〻入寇したから、高宗はこれを滅して、その領地を併せ、更に今のチベット・青海を服し、滿洲・樺太までも唐威が及んだ。時に朝鮮半島に於ては、高句麗が百濟と同盟して、新羅に對抗したが、唐は新羅を援けて百濟を亡ぼし（皇紀一三二三年天智天皇の御代）、日本の勢力をしりぞけ、ついで高句麗を滅し、平壤に安東都護府を置いて、半島を統治した。しかし新羅は、やがて唐にそむき、大同江以南の地を領



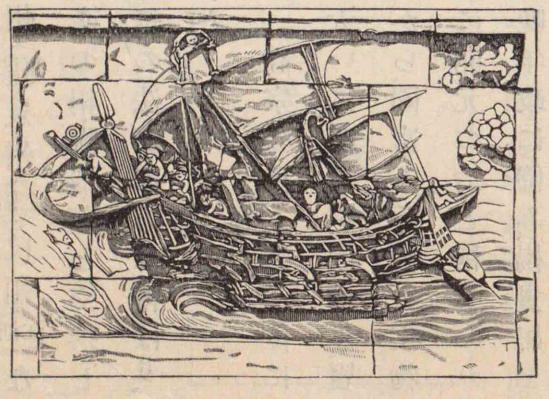
金冠は、新羅の舊都慶州の南門外なるいはゆる金冠塚から發掘せられたもので、技巧やゝ野趣を帶びて居るが、純金製の緣帶の上に、金及び勾玉（マガタマ）の飾を附し、古墳築造の年代から約千四百年前のものと推定せられて居る。石造釋迦如來は慶州の東北なる吐含山にあり、景德王十年（我が孝謙天皇の御代で東大寺大佛開眼式の行はれた年）に成つたもので、支那の石佛が岩壁に彫刻せられたのに反して、この石佛は大石を用ひて像をつくり、これを蓮座上に安置した點がちがつて居る。像の高さは三米に達しないが端嚴で流麗、現存の朝鮮彫刻中最も優（スグ）れた傑作と稱せられる。聖德王の治世は恰も我が聖武天皇の御代に當り、唐の文化を輸入して新羅固有の特色とよく調和した時代と考へられて居る。その王陵の如きも新羅獨特のもので、正面に供物をのせる石床があり、周圍の護石を三角形の控（ヒカヘ）石で支へ控石の間に方位に合せて十二支神像を配置して居る。

印度

し、後に唐と和して、その文化を輸入したから、國都慶州を中心として、學問・佛教・藝術などの發達頗る見るべきものがあつた。

唐と諸外國との交通

かく唐威が發展するにつれ、諸外國との交通も盛に行はれた。即ち太宗は印度に使を遣したが、當時印度は、シラヂチヤ（戒日）王の治世に當り、盛に文藝・佛教を興した時代であつたから、唐の佛教文化はこれが影響をうけて、殊に極盛の域に達した。また太宗の頃、イスラム（回）教の教祖マホメットが、アラビヤ半島を統一して、サラセン國を建てたが、後この國はペルシヤを滅して、唐と境を接するに至り、高宗の時から、直接に唐と交通することゝなつた。唐ではこれを



唐代の船　唐代に南海を航した船でジヤヴアー島のボロブドール寺の彫刻による

大食

大食國といひ、後には主として海路から、廣州(廣東)・泉州(福建)・杭州(浙江)などに來り、香料・象牙・犀角等をもたらし、支那產の絹・陶器・茶と交換した。そして東西交通の結果、支那の養蠶・製紙の法が西方に傳はり、また西方諸國の各種の宗教が唐に傳來した。

支那文化の西傳

楊貴妃　帝國美術院第四回美術展覽會に出品せられた上村松園女史の作品による

玄宗の世　高宗の孫玄宗が位につくや、初め大いに政治をはげみ、賢臣を用ひたから、國富み兵强く、文物も進歩し、世に開元の治と稱せられた。然るに晚年政に倦み、楊貴妃を寵して遊樂を事とし、國民も亦奢侈安逸に流れ、邊境の防備は異民族に任せて、かへりみない有樣であつた。されば異民族出身で、玄宗の寵をうけた安祿山の如きは、つひに兵をあげてそむき、洛陽・長安を陷れ、自ら皇帝と稱し、玄宗は蜀(四川)に逃れた。この亂は前後九年にわたり、唐は大食その他の異民族の援をうけて、漸く平定したやうな次第であつた。

開元の治

安祿山の亂

唐の滅亡　唐はこの亂後、國勢次第に衰へて回復の機を得ず、宦官の專横、武人の横暴、異民族の侵入相つぎ、民心が離れてつひに動亂が起り、やがて賊將朱全忠が、唐を滅して帝位につき、今の開封(河南)に都して、國號を梁と稱した(皇紀一五六七年、醍醐天皇の御代)。唐は國を保つこと凡そ二百九十年、當時世界の文明國として重要な位置を占め、唐土・唐人の

梁

唐(二十世　二九〇年)

高祖1—太宗2—高宗3—中宗4—睿宗5—玄宗6—肅宗7—代宗8—德宗9—順宗10—憲宗11
- 穆宗12
  - 敬宗13
  - 文宗14
  - 武宗15
- 宣宗16—懿宗17—僖宗18—昭宗19—哀帝20

名は支那・支那人の別名として用ひられた。

第十一章　唐代の文化

文化の發達　南北朝以來、支那の南方と北方とに發達して來た文化は、隋を經て唐に至り統一せられた。唐代は、漢族の勢力が最高潮に達した時で、印度その他の西域諸國の風をも採り、よくこれを調和して、當時殆ど世界第一の先進國となつた。さればその制度・文物は、ひろく東方諸國に移されて、これが模範となつた。

官制

制度　(一)、**官制**　中央政府には、三省・六部が設けられた。三省とは中書・門下・尚書をいひ、詔勅の發布及び實行をつかさどり、尚書省はその中心をなし、權力最も重く、吏部・戶部・禮部・兵部・刑部・工部の六部が、これに屬して實際の政務に當つた。地方は十道とし、道を州・縣に分ち、それぞれ長官を置いて治めしめた。

田制・稅制

(二)、**田制・稅制**　唐

三省	長官	職掌	六部	長官	職掌
尚書省	令	六部を管し確定した詔勅を天下に施行する	吏部	尚書	官吏の進退を掌る
			戶部	尚書	戶口の調査と租稅の徵收とを掌る
中書省	令	天子の詔勅の起案をする	禮部	尚書	禮儀及び教育を掌る
			兵部	尚書	軍事を掌る
門下省	侍中	詔勅を審査する	刑部	尚書	刑律を掌る
			工部	尚書	工藝を掌る

稅を納めさせた。けれども安祿山の亂後は、これ等の制もみだれ、德宗の時、資產の高に應じて、夏・秋の二期に課する兩稅法に改めた。

學制

(三)、**學制**　國都の大學を初め、學校の設が頗る備はり、儒學・文學などを課した。その教育は、官吏養成を目的とし、學校の卒業者は、試驗の上これを官吏に任用した。

刑法

(四)、**刑法**　刑罰は、罪の輕重に應じて、笞・杖・徒・流・死の五刑を課し、特に孝道を重んじて、君父に對する罪を重くした。

では、民の貧富の差を少くし、土地の利用を盛にするため、均田法を行つた。即ち土地を國有とし、人民には、均しく口分田を給し、租(米粟)・庸(力役)・調(土地の物產)の三種の

詩文

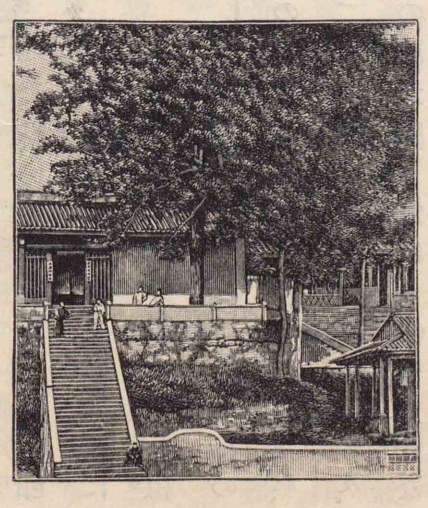
韓愈の廟　廣東省潮州府にある、憲宗の時韓愈がうつされて一年足らず滯在した所である

儒教

印刷法

佛教

文藝　さきに六朝の文學は、たゞ形をかざることを主としたが、唐に至り、詩文は空前の發達をなし、玄宗の時には、李白（字は太白）・杜甫（字は子美）の二大詩人が出で、いづれも古今獨歩と稱せられ、その後白居易（字は樂天）が著れた。文章家では、韓愈（字は退之）・柳宗元（字は子厚）の二人が最も名高く、六朝の風を一洗して古文をとなへ、また女流の詩人もあらはれた。儒教は概ね、訓詁の風をつぎ、文藝の隆盛に壓せられて振はなかつた。この頃書物は、寫本で卷物となつたが、唐末に印刷の法が起り、冊子體となつて學問・文藝の普及をたすけた。



宗教　宗教は、唐代に入り隆盛を極め、（**佛教**）は、太宗の時玄奘、高宗の時義淨など、相前後して印度に留學し、歸國の後その教をひろ

道教

諸種の西教

清眞寺　奉天の南清眞寺で清朝初期に建てられた回教寺院である、これは本堂を示したものでその後部に六角三重の塔があり、ミーラブ（禮拜龕）は塔の奥の壁面につくられて居る

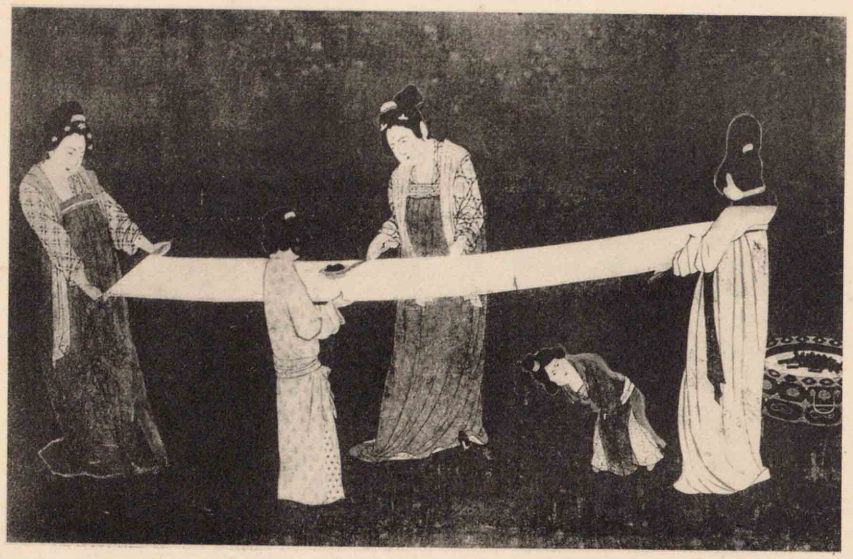
めた。これがために印度の佛教藝術をとり入れて、美術工藝が榮え、殊にその思想は、儒教に感化を及ぼして、後に宋學の發達を見るに至つた。（**道教**）は、唐の王室が老子を祖先と稱し、これを國の正教として保護したので、頗る盛になつたけれど、概して佛教に及ばなかつた。（**諸種の西教**）その他西域から新に傳來した諸宗教も行はれ、高祖の時、ペルシヤのゾロアスタ教が傳へられて、祆教と稱せられ、太宗の時には、キリスト教の一派なる景教が傳はり、大秦寺が建てられ、また大食人の來航する諸港や、西北の邊境には、イスラム教が行はれ、唐ではこれを回々教と呼んだ。

佛教藝術
南宗畫・北宗畫
書道
遣唐使
律令制度
文學

美術工藝　佛教の興隆と共に、印度・ガンダーラの様式が、續々輸入せられ、美術工藝は、唐に至り精妙の極に達した。繪畫に於ては、吳道玄が佛畫をよくし、また寫生風な山水畫も新しく起り、李思訓は、強い線を用ひる北宗畫をはじめ、王維は、水墨の畫風を起して、南宗畫の祖と仰がれる。書道も漸く盛となり、晉の王羲之の風をついで、この時代には、顏眞卿・張旭などの名手があらはれた。

唐の文化と我が國　我が國は、舒明天皇の御代から、遣唐使及び留學生を派遣して、唐の文化を輸入したので、奈良時代から平安時代の初期にかけ、制度・學藝・宗教・美術など、ひろく唐風の影響をうけた。まづ平城・平安兩京の規模が唐都洛陽・長安の市制にならつたのを初めとし、律令制度は、多く唐制をとつて、我が國情に適應せしめた。また奈良時代から、漢文學が流行し、正史や詩集が、勅命により撰修せられ、政教の要道を明かにした貞觀政要・群書治要などの

唐代の繪畫



砧　打

引路菩薩

吉祥天女

砧打の圖は原名を擣練圖といひ、唐の美人畫家張萱の描いたのを、宋の徽宗が摸寫して傳へたものである。その豐頰肥滿の風姿は、唐代美人の特色を示すもので、原圖は米國のボストン美術館に藏せられる。引路菩薩圖は、敦煌で發掘せられたもので、菩薩は名の如く、死者を淨土にみちびくものと信ぜられるから、一女人をみちびいて淨土に行く樣を描いて居る。製作年代は唐の中期と推定せられるが、以てその頃西域に行はれた畫風を察すべきである。吉祥天女圖像は、奈良縣藥師寺の秘藏で、奈良時代の末光仁天皇の頃の製作と考へられて居る。その表情や姿態は、佛像といふよりもむしろ美人畫に近く、唐の風を輸入して更に我が國で練成せられた傑作である。

書は、御歴代の天皇深くこれを尊び給ひ、殊に白居易の詩文はひろく愛好せられて、國文學にも感化を與へ、また阿部仲麻呂・吉備眞備等は、留學生として唐に文名をはせた。

佛教

佛教も、奈良の都に榮えた各宗は勿論、最澄・空海により傳へられた天台・眞言の二宗は、いづれも唐に行はれたもので、造寺・造佛から社會事業に至るまで唐風をまねること多く、咲く花の

我が國の舞樂

萬歳樂(上)と太平樂(下)とを示す、前者は文舞、後者は武舞、多く賀儀に行はれる

藝術・風俗

如き奈良の都の藝術も、唐から移し植ゑられたものが多かつた。

日唐官制對照表

唐	三省	尙書省・門下省・中書省
	六部	吏部・戶部・禮部・兵部・刑部・工部
日本	二官	神祇官・太政官
	八省	中務省・式部省・民部省・治部省・兵部省・刑部省・宮內省・大藏省

ば朝廷・社寺で行はれた種々の舞樂(ブガク)をはじめ、服裝・化粧法(ケショウホウ)・年中行事(ギョウジ)など、唐から傳へられて、今なほ存するものが少くない。

中古史大要

中古期は、我が孝靈天皇から、醍醐天皇に至る時代に當り、約一千百年間(皇紀四四〇—一五六六)で、秦の統一から唐の滅亡に至る間をいふ。秦及び漢の世は、前期以來發展して來た漢族の勢力が一層加はり、よく北方の異民族を服するとと共に遠く西域諸國との交通が開け、佛敎その他の西方文化を傳へて、支那文明に新しい活氣を帶びるに至つた。然るに後漢が亡びてから、漢族の意氣頓(ニハカ)に衰へ、塞(サイ)外の異民族が侵入して、黃河の流域を占め、つひに南北朝對立の姿となり、漢族と勢力を競(キソ)うた。その後隋が、北方から起つて天下を一統し、唐これをついで漢族の勢力が最高潮に達し、その文化が花の如くに榮えて、ひろく東洋諸國に影響を及ぼした。

五代

宋の太祖 當時の眞影による

宋の統一

第三篇　近古

第十二章　五代　宋の統一　遼・金の興亡

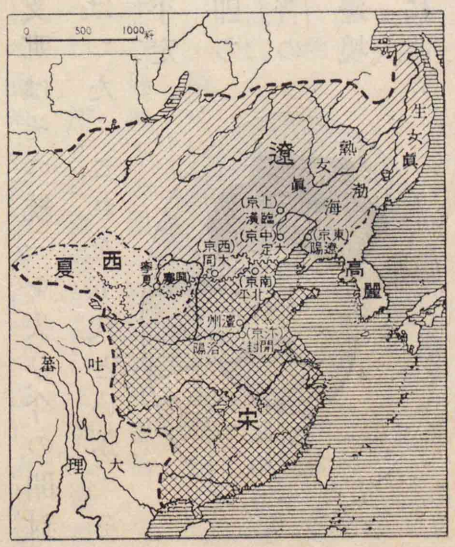
宋の太祖　唐の滅後五十餘年、支那はその統一を失ひ、今の開封(カイホウ)(河南)を中心として、王朝が五度もかはつた。これを五代といふ。そして趙匡胤(チョウキョウイン)といふものが、爭亂を平定して、開封で帝位についた。これ卽ち宋の太祖である。太祖は、宰相趙普の計を用ひて、文治政策をとり、當時邊境の異民族の勢力が、漸く強かつたにも拘らず、いたく軍人を抑(ヤク)へて、文官をして地方を治めしめ、また大いに學問を奬勵した。

渤海
遼

宋と遼

宋遼關係要圖

宋・遼の關係　唐の玄宗[6]の頃、滿洲に渤海國が興つたが、その後、遼河上流の契丹人が勢を得、五代の頃、自立して遼と號し、滿洲及び內蒙古を領し、更に支那を侵すことゝなつた。宋の太宗[2]は、國內統一の勢に乘じて遼を討ち、却つて大敗し、次の眞宗[3]も亦、遼軍を澶州に防ぎ、つひに勝たずして、銀・絹などの歲貢を贈ることを約した。かくて宋は、文弱の弊漸くあらはれ、絕えず外國から輕んじられるに至つた。



王安石の新法　宋の仁宗[4]は、民を愛し賢者を用ひ、宋代第一の名君と稱せられたけれど、外政はやはり不振を極めた。そこで神宗[6]が卽位するや、經世家として知られた王安石を擧げて宰相となし、

富國强兵策

新法・舊法の爭

王安石の像
清人の描いた肖像畫による

金

富國强兵の策を立てゝ、大いに制度の改革を行ひ、政府みづから或は民に金を貸して利を收め、或は物產の賣買を行ひ、また民をして馬を養ひ、兵を練らしめた。しかしもともと政府の財政をゆたかにするを目的としたから、國民は必ずしもこれに心服しなかつた上に、司馬光(溫公)以下の舊制度をよろこぶ人々は、强くこれに反對した。これから朝臣も、新法・舊法の二派に分れて互に政權を爭ひ、女中の堯舜と呼ばれる宣仁皇太后(神宗の母)が、政を攝したこともあるけれど、國力が益〻衰へた。殊に徽宗は、奢侈を好み、藝術の奬勵に力をつくしたが、政治はみだれて行くのみであつた。

金の興起　滿洲に於ては、遼が次第に衰へ、女眞族の長アクダ(阿骨打)が自立して、今のハルビン附近に都し、國號を金と稱した。こゝに

宋と金

靖康の難

南宋

司馬光の像　晩笑堂畫傳による

於て宋は金と結び、宿敵遼をはさみ擊つたが、宋軍勢振はず、金ひとりよく戰ひ、遼を滅したので、やがて金が南侵し來り、宋・金の對立となつた。

宋の南渡　欽宗の時、金は大擧南下して、宋の國都開封を陷れ、徽宗・欽宗以下を捕へて北に歸つた。これを時の年號により、靖康の難といふ。宋に於ては、高宗が卽位し、金の勢を恐れて江南に移り、今の杭州（浙江）に都をうつした（皇紀一七八七年崇德天皇の御代）。

北宋（九世　一六八年）

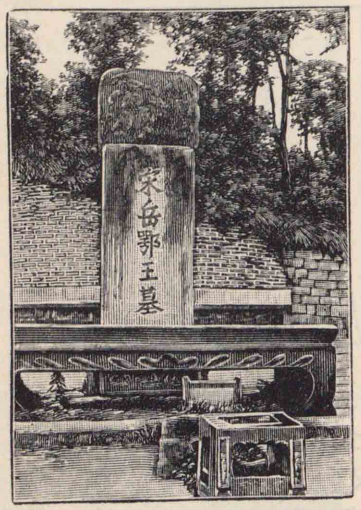
太祖[1]—太宗[2]—□—□—眞宗[3]—仁宗[4]
太宗[2]—□—□—英宗[5]—神宗[6]—哲宗[7]—欽宗[9]
神宗[6]—徽宗[8]—高宗[南]

世に高宗以後を南宋といひ、金は都を今の北平にうつし、北支那を支配するに至つた。この間に、南宋の國論は二派に分れ、岳飛・韓世忠などは、主戰論を唱へて、大い

宋金關係要圖

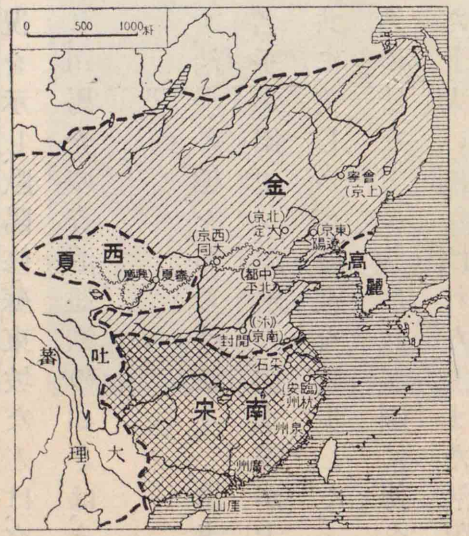
佛教

儒學



岳飛の墓　浙江省杭州にある、鄂王とは死後に贈られた爵で墓前に秦檜夫妻の鐵像を置き參詣者これを鞭つといふ

に北伐の功を立てたが、高宗は性弱く平和を好み、宰相秦檜の說を用ひて金と和し、地を割き臣と稱して、歲貢を贈ることを約し、岳飛を殺した。その後宋・金は、共に國勢が衰へ、蒙古族が、漠北から起り、つひに兩國を併せることゝなつた。



宋の儒學・文藝　宋の佛教は、漸く不振に陷つたが、たゞ禪宗は盛に行はれ、從つて禪風は、學問・藝術に深い影響を及ぼした。殊に儒

學は、訓詁の風を捨てゝ、理論的研究を旨とするもの多く、かゝる傾向は南宋の朱熹(シュキ)により大成せられた。故にこれを宋學若くは朱子學といひ、その尊王斥覇(セキハ)の歴史思想と共に、我が國にも輸入せられ、尊皇の士氣を振作(シンサ)した。詩文は、唐につぐ盛況を示し、歐陽修(オウヨウシュウ)・蘇東坡(ソトウバ)などは、文章家として名高く、修史も亦行はれ、司馬光の資治通鑑(シツガン)の如きは、その代表的なものであつた。

朱熹の像　晩笑堂畫傳による

詩文

宋の藝術　禪宗の風は、藝術にも、淸淡(タン)の趣をあらはした。繪畫は著しく發達し、馬遠(バエン)・夏珪(カケイ)などの名手が出でゝ、墨繪(スミエ)の山水畫が大成せられ、奢侈の風が盛になると共に、美しい花鳥畫も進歩した。これ等の畫風は、禪宗・花道・陶器製造の法などゝ共に、我が國に傳へられ、鎌倉時代から東山時代にわたり大いに行はれた。また活版

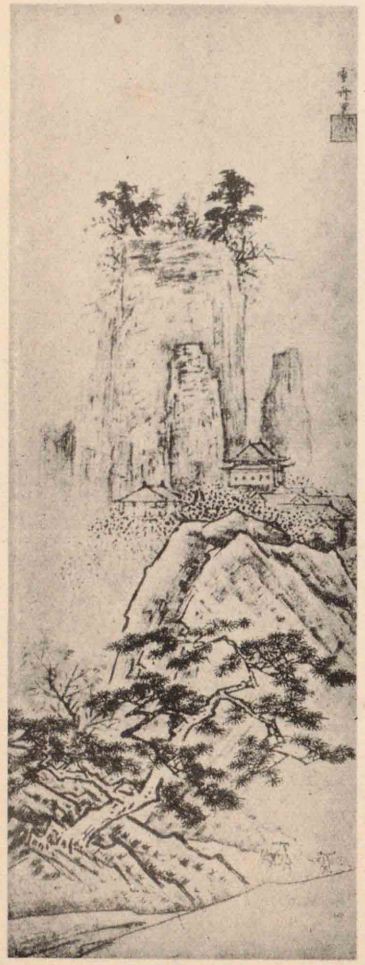
繪畫

工藝

活版印刷

北宗畫

馬遠山水圖



雪舟山水圖

宋代の山水畫には、精巧な青綠の一派と、奇にして筆力のつよい水墨の一派とがあつた。馬遠は卽ち水墨の一派で、寧宗理宗に仕へその妙をほしいまゝにし夏珪と並んでこの派の第一流と推された。その畫風は、元から明に傳へられたが、雪舟は明に留學して、この種水墨の妙を發揮した。專ら風趣をたつとび、意を寫して形に拘泥(コウデイ)せず、筆力のつよいのがこの派の特色である。

蒙古族

チンギス汗の像　當時の眞影による

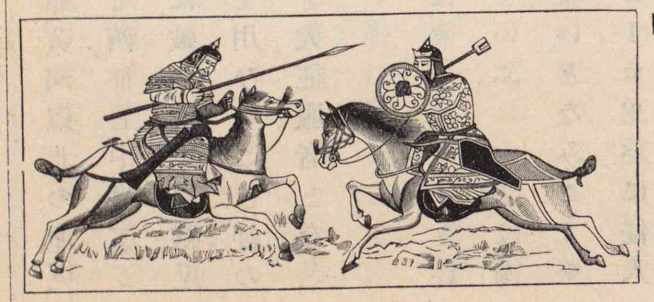
太祖の經略

蒙古兵　當時の繪畫による

印刷術は宋に起り、我が國にも傳はり、五山版などの印行を見るに至つた。

第十三章　蒙古の勃興　宋の滅亡

チンギス汗　蒙古族は、外蒙古地方に遊牧し、遼及び金の支配をうけたが、南宋の孝宗の世に、テムヂン(鐵木眞)といふものが部長となるや、次第に勢を得て、內外蒙古を從へ、その君主となり、チンギス(成吉思)汗(カン)(強盛な大帝の意)と號した(皇紀一八八六年、土御門天皇の御代)。これを蒙古の太祖といふ。チンギス汗は、まづ金を攻めて、



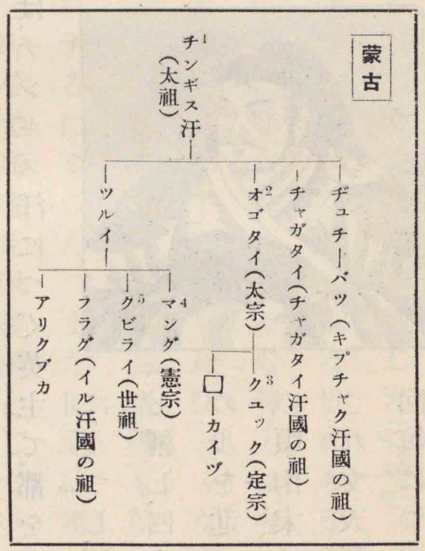
太宗オゴタイ

バツとキプチャク汗國

その都を陷れ、金は難を避けて、開封に遷つたから、黄河以北の地は、ほゞ蒙古の手に歸した。ついで大軍をひきゐて西征し、中央アジヤ・ペルシヤを討ち、ロシヤ諸侯の軍をカルカ河に破つて東に歸り、間もなく病死した。彼は逆境の間に成長し、兵を用ひること神の如く、一生の間に多くの地を併せ、世界に比類なき大征服者となり、またこれを統べる政治にも巧みであつた。

バツ及びフラグの西征　太祖の子オゴタイは、クリルタイといふ會議で、推されて帝位についた。これを太宗といふ。太宗は、南宋と同盟して金を滅し、またカラコルムに宮城をいとなみ、こゝを國都とした。ついで甥バツ（拔都）に大軍を授けて、ヨーロッパに侵入せしめ、ロシヤ・ポーランド・ハンガリヤを荒し、到る處敵を破つて、歐洲諸國民の心膽を寒からしめた。たまゝ太宗の死を聞き、軍を收めて東に歸つたが、バツはヴォルガ河畔のサライにとゞまり、キプチャク（欽察）汗國を建て、ロシヤを支配することゝなつた。その後憲宗立つや、弟フラグ（旭烈兀）をして、西アジヤを征服せしめ、フラグは、大食の都バグダードを陷れ、シリヤ・アラビヤをも服して、マラガを都とし、イル（伊兒）汗國を建てた。蒙古人は性勇敢で、よくこれ等の戰に勝を占めたが、その女子もまた家を守つて、これ等戰士をして後顧の憂なからしめた。

フラグとイル汗國



高麗

高麗と蒙古　これより先、朝鮮半島の新羅は、唐末に至り國勢衰へ、五代の頃、王建といふものが、今の開城に據り高麗（コウライ）を建て、新羅を滅して半島を統治した（皇紀一五九六年朱雀天皇の御代）。これを高麗の太祖といふ。

高麗は、南方の宋に好を通じ、また北方の遼・金にも朝貢したが、蒙古起るに及び、太宗の時征服せられたけれど、蒙古の蠻風を厭ひ、叛服常なき有樣であつた。

滿月臺 朝鮮開城にある高麗王宮の跡、宮殿は燒けて今は僅かに礎石を存するのみである

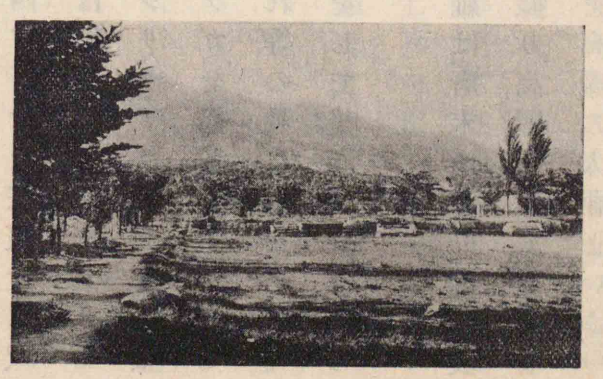
蒙古と高麗

世祖の統一 憲宗についで、その弟クビライ忽必烈が帝位に上り、世祖と稱した。世祖は、チンギス汗につぐ英主で、都を今の北平にうつし、國號を元と稱し、四方に經略の歩を進めた。この頃南宋は甚しく衰へ、杭州の都も攻め落され、文天祥などが、勤王の軍を起して、その回復につとめたけれど、厓山（廣東）の戰に敗れ

世祖クビライ

元

世祖の像 當時の肖像畫、支那風の天子の服をつけ頭は蒙古風の辮髮にして居る



て、宋室はつひに滅亡した（皇紀一九三九年）。かくて支那は、世祖の手に統一せられ、更にその勢力は、今の印度支那半島にも及び、ジャヴァ・スマトラなどの南海諸國も朝貢するに至つた。また世祖は婚を結んで高麗を保護國とし、ついでこれを介して、我が國と交渉を開いた。

南宋の滅亡

（後宇多天皇の御代）

元と日本

南宋

〔九世　一五三年〕

太祖 —（九代略）—（六代略）— 孝宗（南2）— 光宗（南3）— 寧宗（南4）— □ — 度宗（南6）— 帝昺（南9）
寧宗（南4）— 理宗（南5）
度宗（南6）— 恭宗（南8）
恭宗（南8）— 端宗（南7）

○南宋第一代高宗である　（北宋系圖參照）

即ち文永・弘安の再度の元寇を起し、兵力を以て、我を從へようとしたが、我が擧國一致の奮戰により、殆ど擊滅せられ、つひにその志を果さなかつた。そして間もなく、逆に我が邊民が、元の沿海を

文天祥の像 北平の文丞相祠に安置せられて居る本尊である祠は元代の刑場柴市口にある

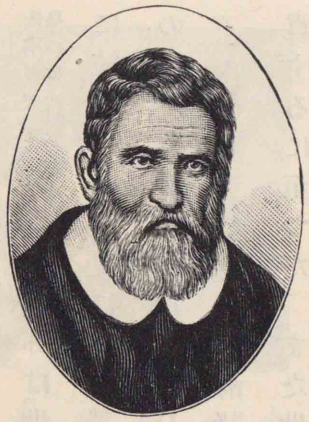
荒すことゝなり、支那ではこれを倭寇と稱して、大いに恐れた。

元の政治

元の極盛　元は塞外の異民族から出て、支那全土を支配したものの始で、世祖はひろく人材を登用し、各その才をつくさしめ、殊に漢族を治めるには、儒教を奬め、文治を主とした。されば元の勢力は、世祖の時に極盛に達し、

元の領土

その領土は、アジヤに於ける廣き部分と、ヨーロッパの一部とを含み、世界空前の大版圖をなし、元の皇帝は、支那・蒙古・滿洲・高麗・チベット等を支配し、太祖以來一族諸王を封じた四大藩國は、皇帝に屬して、各自その領地を治めた。故に東西の交通が頗る便利となり、西域諸國の人々が、學問・宗教・藝術な



マルコポーロの像

國名	始祖	首府	領土
チャガタイ汗國	チャガタイ	アルマリク（天山北路）	中央アジヤ・天山北路地方
オゴタイ汗國	オゴタイ	エミル（外蒙古）	蒙古の西部・アルタイ山脈地方
キプチヤク汗國	拔都	サライ（ロシヤ）	西アジヤの一部及び歐洲の一部
イル汗國	旭烈兀	マラガ（ペルシヤ）	印度河以西の西アジヤ地方

東西の交通

ど、各その長ずる所をもつて、元に來り仕へた。中にもイタリヤ人マルコ＝ポーロは我が國をジパングの名により、東方の黃金島として、ヨーロッパ人に知らせた。なほ磁針・火藥及び印刷術なども、西方に傳へられ、ヨーロッパに於ける地理學や、航海事業などの發達を促し、世界文化の發展をたすけたことが多かつた。

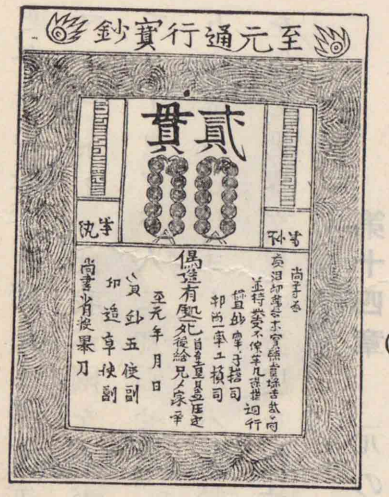
第十四章　元の衰亡　明の統一

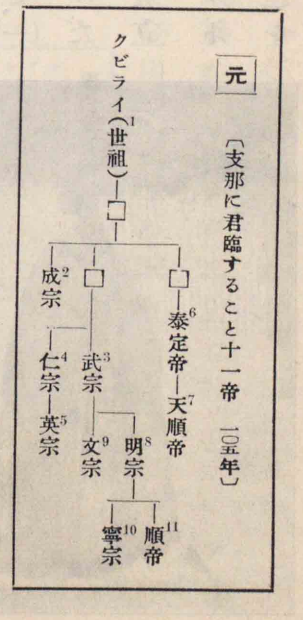
元の衰亡　元は世祖の死後、また英主なく、國運が次第に傾き、(一)權臣が專横を極めて、政令をみだし、またほしいまゝに天子の廢立を行ひ、(二)代々の天子が、チベットに發達したラマ（喇嘛）教（佛教の一派）を

ラマ僧　大禮服をつけた現代のラマ僧である

信奉し、ラマ僧の專横を招き、ために國費をつひやすこと多く、(三)多年戰役をつゞけた結果、財政の困難を生じ、みだりに紙幣を發行して國民の生活を苦しめ、(四)いつしか漢風に化せられ、著しく軟化して、固有の武強の精神を失ひ、(五)久しく壓迫せられた漢族の不平が高まり、つひに四方に亂が起り、順帝の時都をすてゝ、蒙古に逃去ることゝなつた(皇紀二〇二八年長慶天皇の御代)。

元の紙幣 元の至元通行寶鈔で紙でつくる、至元は世祖の時の年號であるがすべて世祖の時造られたとは限定しがたい、一貫は錢一千文で銀一兩、五貫で金一兩に準じ通用した





明の太祖 元末の亂に、朱元璋(シュゲンショウ)は一貧民から身を起し、南支那を平定して、今の南京で王位につき、國號を

明

漢族復興主義

明の成祖の像 當時の眞影による

成祖の內治

成祖の對外經路

明(ミン)と稱した。これを太祖洪武(コウブ)帝といふ。蓋し明代から、一世一元の制をとつたので、年號を以て帝王の名を呼ぶ風が起つた。太祖は、漢族復興主義を唱へて民心を收め、天下を統一して、要地に諸子を封じ、多くの功臣を殺して、一家子孫の安全をはかつた。

成祖の雄略 太祖の孫惠帝(ケイテイ)立つや、諸王の領地をけづり、その勢力を抑へたので、叔父燕(エン)王は、兵をあげて南下し、惠帝を逐ひ、自ら帝位に上つた。これを成祖永(エイ)樂(ラク)帝といふ。成祖は、都を今の北平(これを北京といふ)にうつして、官制を改め、學問を勵まし、萬里の長城を修築し、兵制を整へて、大いに內治につとめ、更に對外經略の歩を進めた。即ち親征して蒙古を服し、宦官鄭和(テイカ)をして、南海諸國から遠くアフリカの東海岸地方までも巡航せしめたから、從つてこれ等諸國との

通商も、自ら盛になつた。かくて成祖から仁宗を經て、宣宗宣德帝に至るまで三十餘年の間、國内よく治まり、明の盛時をあらはした。

チムール大王　元の衰亡と共に、その四大藩國も不振に陷つたが、たまたまチャガタイ（察合臺）汗國に、チムール（帖木兒）大王が起り、局面が一變した。チムールは、チャガタイ汗國の宰相の家に生れた蒙古人で、世界統一の大志を抱き、主家の衰亂に乘じ自立して、サマルカンドに都した（皇紀二〇二九年、長慶天皇の御代）。そしてイル汗國、キプチャク汗國を併せ、アジヤの西半を平定し、ひろく人材を用ひて、内治に意を注ぎ、イスラム教を採用し、學問を勵まし、教育を奬め、産業を興し、交通を開くなど、治績頗る見るべきものがあつた。かくて成祖永樂

チムールの像　印度人の描いた畫像による

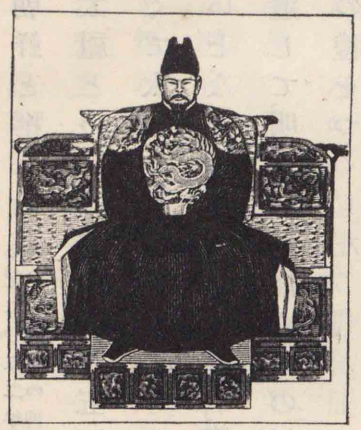
チムールの帝國

チムールと明

帝の時、明に内亂ありと聞き、東部アジヤをも從へんとし、親しく大軍をひきゐて、征明の途に上つたが、途中で病のために倒れ、間もなくその國土も分裂した。

第十五章　明の衰運

李氏の朝鮮　これよりさき高麗は、歴代奢侈を事として、政治がみだれ、貴族が權をほしいまゝにし、また甚しく佛教を尊信したので、僧侶も專横に流れ、國力が次第に衰へた。殊に元の世祖以後は、内政・外交共に殆どその命をうけ、元寇に參加して一層衰亡を早め、加ふるに倭寇の防禦になやみ、内外漸く多事となつた。この時に當り、李成桂は、倭寇を撃退し



朝鮮の太祖の像　當時の眞影による

高麗の衰亡

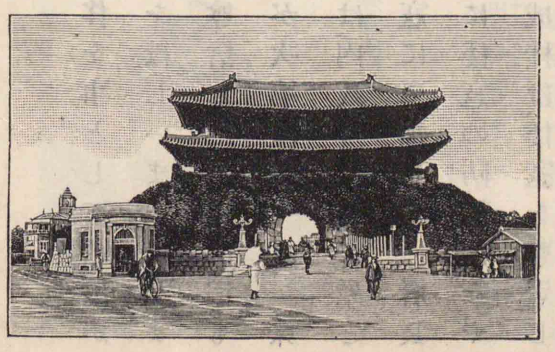
て人望を收め、高麗に代り王位につき、國號を朝鮮と稱した（皇紀二〇五二年、後龜山天皇の御代）。これを朝鮮の太祖といひ、高麗は凡そ五百年で亡んだ。かくて太祖は、都を京城にさだめ、壯大な宮殿をいとなみ、制度をとゝのへ、學問を興し、屢〻使を遣して、明と好を修め、その封冊をうけて、事大の禮をつくした。

朝鮮

[京城の南大門] 南大門の現狀で李氏の都城の威容を示すものである

明と朝鮮

北人と南倭 明は英宗の頃から、宦官が政治をみだし、外はいはゆる北虜・南倭の禍頻に到り、國勢が漸く傾いた。即ち蒙古族は、勢を復して北邊を侵し、英宗これを親征して土木（河北）に敗れ、國都である今の北平が掠められたこともあつた。倭寇は、惠帝の時、足利義滿を手なづけて、これを禁絶せしめんとしたが、その後連年明の東南海岸を掠め、世宗嘉靖



蒙古の南侵

倭寇

帝の時代には、明の邊民が倭寇をよそほひ、自國の海岸を荒しまはる有樣であつたから、帝は戚繼光等をして、これを福建に擊破せしめ、やつと倭寇の氣勢を殺ぐことができた。

朝鮮の役 豐臣秀吉の海内を統一するや、大いに海外に發展せんとし、諸外國に對して種々交渉を試みたが、容易に解決しなかつたので、つひに明を征せんとして文祿・慶長の役をひき起すに至つた。明の神宗萬曆帝は、大兵を出して朝鮮を援けたけれど、精鋭な我が軍のために大敗を招き、その結果多くの軍費をつひやし、財政が困難となり、課稅を重くしたので、民心が明室を離れ、その衰亡を早めることゝなつた。

[烽火臺の跡] 福建省福州の南臺にある烽火臺の遺跡で倭寇に備へたものである

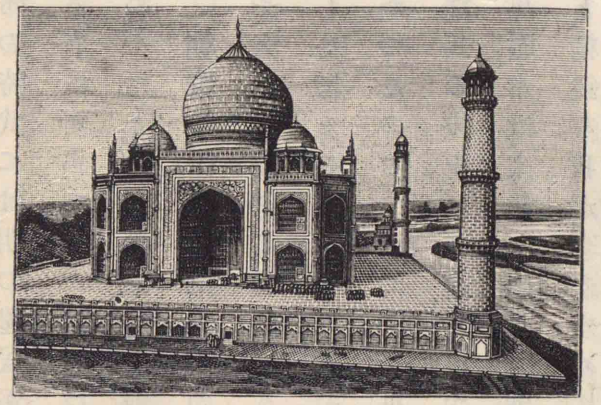
豐臣秀吉の對外發展

明の朝鮮援助

第十六章　ムガール帝國　ポルトガル・オランダ等の東洋經略

ムガール帝國

チムール大王の死後、凡そ百年を經て、五世の孫にバベルが出で、中央アジヤから印度に攻め入り、デリーに都し、ムガール（莫臥兒）帝國の基を開いた（皇紀二一八六年、後柏原天皇の御代）。バベルの孫アクバル大帝は、善政を行ひ、學問を興し、大いに民心を服せしめたから、帝の治世から凡そ百五十年間は、帝國の威令が、殆ど全印度に及び、學問・藝術なども頗る榮えた。



バベル

アクバル大帝

タジュマハール　印度のアグラ附近にあるアクバル大帝の孫シヤージハン王及びその皇后の陵廟である、白大理石に瑪瑙、珊瑚などを嵌入し世界屈指の美しい建築と稱せられる

印度新航路の發見　元代に於ける交通發達の結果、ヨーロッパ人は、珍らしい東洋の事情を聞知し、これ等の諸國と交通せんことを望んだ。然るに元の領土分裂の後は、東西の交通も漸く衰へ、加ふるにトルコ人が西アジヤの地を占め、その通路をふさいだので、別に安全な航路を發見する必要が起つて來た。されば明の中頃から、西ヨーロッパの諸國は、大膽な航海・植民の業を競ひ、新航路を開いて、世界の寶庫たる東洋に達せんとした。中にもポルトガル人ヴァスコ＝ダ＝ガマは、アフリカを迂回（ウカイ）して印度に達し（皇紀二一五八年、後土御門天皇の御代）、これから西洋人の來航する者が、漸く多きを加へた。

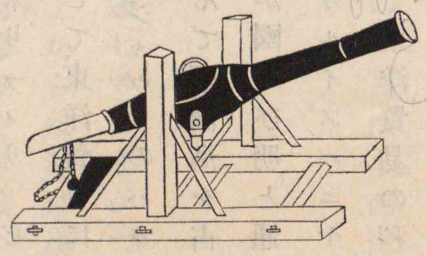
東西交通の變遷

西洋人の東漸　その後ポルトガル人は、印度のゴアを根據地となし、更に南支那海に出でて、澳門（マカオ）を占領し（皇紀二一七年、後奈良天皇の御代）、支那及び我が國と通商を行ひ、佛朗機（フランキ）砲と稱する火器を明に傳へた。ま

ヴァスコ＝ダ＝ガマの印度來航

フランキ砲　フランキとは明人がポルトガル人を呼ぶ名でその砲は歐式の火砲である

ポルトガル人

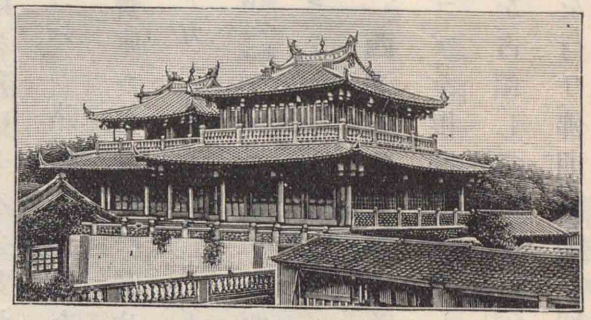


イスパニヤ人

オランダ人

赤嵌樓（上）臺灣臺南市にある、もとオランダ人のプロヴィンデンチヤ城でその政廳たりし所である

マテオリッチ　マテオリッチが上海の人徐光啓と道を談ずる所で明の風にならひその衣冠をつけて居るが深目長鼻、長髯など一目して西洋人たることが知られる



たイスパニヤ人は、東方から來り、フィリッピン群島のマニラを根據地として、東洋貿易に從事し、ついでオランダ人は、ジャヴァのバタヴィヤを根據地とし、更に進んで臺灣島を占領して（皇紀二二八四年、後水尾天皇の御代）、盛に我が國及び明と通商を營んだ。そしてポルトガル・イスパニヤと競爭してこれを排し、久しく東洋貿易の利益を獨占（ドクセン）した。

天主教の傳來　西洋人の東漸につれ、キリスト教の一派であるジェスイット（耶蘇會といふ）の教士（宣教師）が盛

フランシス＝サビエル

マテオ＝リッチ

（耶蘇會）

に東洋布教を試みた。中にもフランシス＝サビエルは、まづ印度に來り、ついで我が國に渡來して布教に從ひ、後マテオ＝リッチ（利瑪竇）も支那に來り、明の神宗[14]の許可をうけて、今の北平に教會堂を建てた。明人この教に歸するもの多く、これを天主教と呼んだ。

西洋學術の輸入　その後相ついで支那に入國した教士は、つとめて支那風に同化し、また漢語・漢文に習熟し、概ね天文・曆法・算數・地理・測量・砲術等の學術・技藝に通じてゐたから、布教のかたはら西洋の學術を紹介（ショウカイ）することに力をつくした。

第十七章　元・明の文化

概說　元は蒙古地方から起り、特有の文化が發達してゐなかつたので、政治上から漢族を支配したけれど、文化の上からは、逆に漢族に化せられた。從つて支那統一以後は、學問・藝術等多く漢族の

風を用ひたが、なほひろく一般屬領は勿論、遠く西洋文化をも輸入することにつとめた。明は元を逐うて、漢族復興主義を唱へたけれど、多くは形式に流れ、柔弱に陷り、清新な趣が少かつた。

儒學 元の儒學は、概して不振であつたが、明の中頃に至り、王陽明守仁があらはれ、知行合一を唱へ、人格修養を重んじ、別に陽明學を開いた。そしてこの後朱子學と相對してひろく世に行はれ、深く人心に感化を與へた。

王陽明の像 晩笑堂畫傳による

陽明學

文藝 元に於ては、詩文よりも戲曲・小說などの俗文學が榮え、殊に演劇の體制が整へられた。西廂記・水滸傳・三國志演義などは、この種俗文學の名作として知られる。明に至り、この傾向が益々發展して、西遊記の如き奇書もあらはれたが、一般に卑俗に陷つた。また詩文も古人の詞句をとり、唐以前の風

俗文學

詩文

に復せんとする古文辭の派が起つたけれど、多く古人をまねるだけで、獨創の精神が乏しかつた。

ラマ教 支那の佛教は、元代に衰へたが、これに代つてラマ教が流行した。ラマ教は、チベットに行はれた佛教の一派で、主として祈禱・修法などを行つたが、世祖クビライが、チベットのパスパといふ僧を信任し、帝師としてから、元は歷代あつくラマ教を信奉し、ラマ僧もこれに馴れて、チベットの政權と教權とをにぎり、次第に專横に流れることゝなつた。こゝに於て、明初にツォン＝カパなる高僧が、その改革を行ひ、從來ラマ僧の着用した紅衣・紅帽に代ふるに、黃衣・黃帽を以てし、これを黃衣派

ツォンカパ チベットに傳はる畫像である

パスパ

ラマ教の改革（黃衣派）

ダライラマの殿堂　チベットのラサにある大ラマ寺院で且つ王宮を兼ねたものと稱してよい

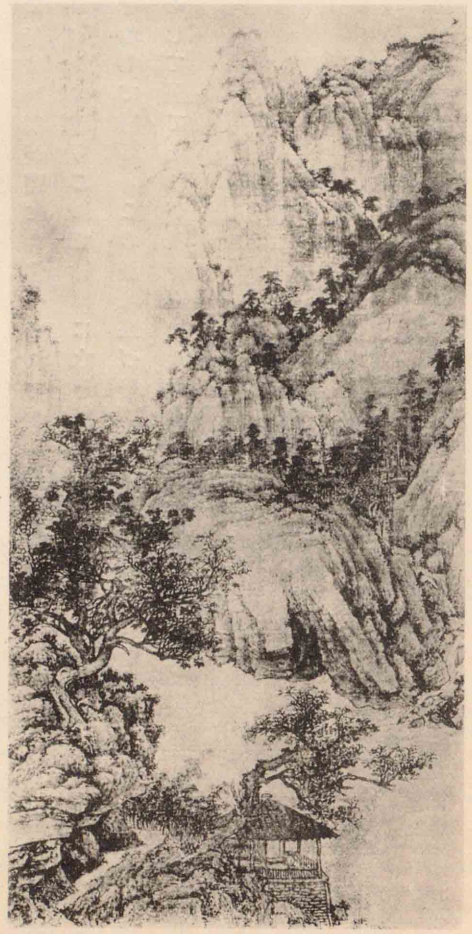
と稱した。この後黃衣派漸く勢を得て、ツォンカパの高弟がダライラマと稱し、チベットの法王となり、ラサにおて政教を統べ、ラマ教はひろく塞外に行はれるに至つた。

美術工藝　元は、美術も一般に盛でなかつたが、元初の趙子昂は、書畫ともによくして宋風を傳へ、元末には、黃公望・倪瓚などの名手が出て、淡白で調子が高い水墨の南宗畫風を大成した。

明代には、奢侈の風が盛で、美術工藝も大いに發達し、初期には戴進が出で、北宗畫が榮えたが、後南宗畫が流行して、沈周・文徵明・董其昌などの名手があらはれた。また明の宣宗の宣德時代を中心とし

南宗畫

南宗畫



沈周　虛亭聽泉圖

燕村　竹溪訪隱圖

明の山水畫は、前代以來の北宗畫風をつぐものと、これに對して南宗文人者流の一派とがあつた。沈周(石田)は後者の隨一で、虛亭に坐して泉聲を聽く詩境を描いた圖は、山間溪谷の幽かな趣をあらはさうとしたものである。この畫風は清初に大いに行はれ、我が國にも傳へられて文人の間にもてあそばれた。蕪村の竹溪訪隱圖の如きは卽ちこれで、竹林に水を配し、遠景として山々をあらはし、清らかな朝の趣を示して居る。この派は筆づかひが穩和で、水墨にうるほひがあり、幽深な趣をかくして居て、それが我が國に入るとやはり我が國の風物を畫面にとり入れた。

て、陶磁器・銅器などを製出する諸種の工藝も發達した。

元・明の文化と日本　我が國と元との間には、或は元寇、或は倭寇があつたにも拘らず、絶えず私の交通が行はれた。元末に足利尊氏が、天龍寺船を遣して、元と通商を開始したが、その後室町幕府は、ひきつゞき明と國交を修め、元・明の文化は、室町時代以後、殊に盛に我が國にも傳へられた。朱子學・陽明學は、共に江戸時代に大いに榮え、朱子學は江戸幕府の正學として採用せられ、陽明學派にも、中江藤樹・熊澤蕃山(バンザン)などの名儒を出した。荻生徂徠(オギウソライ)は、古文辭の學風を、儒學に應用して一派を開き、瀧澤馬琴(タキザハバキン)の作品は、少からず支那小說の影響をうけたものと考へられてゐる。江戸時代に、黃檗(オウバク)宗の僧侶や、商人などを通じて傳へられた明代の書・畫の風は、唐樣(カラヨウ)書風・文人畫と稱し、畫家や文人などの間に歡迎せられた。

近古史大要

近古史は我が醍醐天皇から後水尾天皇に至るまで凡そ七百年間（皇紀一五六七―二二七六）に當り、五代から明末に亘つてゐる。この期は、塞外民族の勢力が盛な時代で、滿洲族がまづ興り遼・金二國を建て、漢族は南方支那に據り、これと抗爭した。ついで蒙古族が元を興して全く漢族を服し、歐亞に跨（マタ）がる一大帝國を建設し、東西の交通が盛に行はれて、その文化の交渉も著しかつた。元の衰後、アジヤの西半にチムール帝國印度にムガール帝國が建てられ、蒙古族は、この期に極盛時代をあらはしたが、支那に於ては漢族が勢を復して明を建てた。そして西洋人はこの期に入り次第に東洋に來り、後日の發展の基礎を固めた。

第四篇　近世

第十八章　清の興起　聖祖・高宗

滿洲族の勃興

清

清の太祖の像（當時の眞影による）

清の太宗

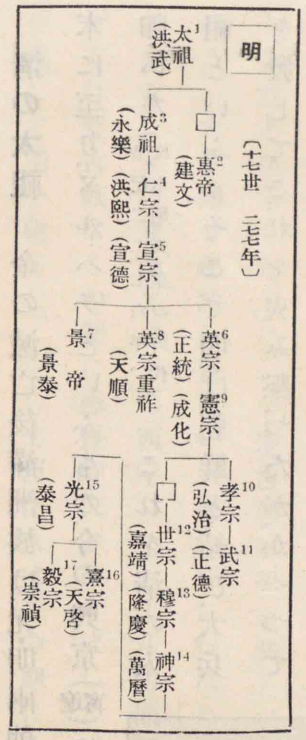
清の太祖　金の滅亡後、滿洲族は、元・明兩朝の支配をうけたが、明末に至り、ヌルハチといふもの、今の興京（遼寧）に起り、自立して王位に卽いた（皇紀二二七六年、後水尾天皇の御代）。これを清の太祖といふ。そこで明は朝鮮と結び、大兵を發してこれを夾（ハサ）み擊つたが、かへつてサルフ山に於て大敗し、太祖は進んで今の奉天に都を遷した。

明の滅亡　太祖の子太宗に至り、更に內蒙古を併せ、また朝鮮を征し、これを降して朝貢國とした。明では吳三桂（ゴサンケイ）をやつて、これを

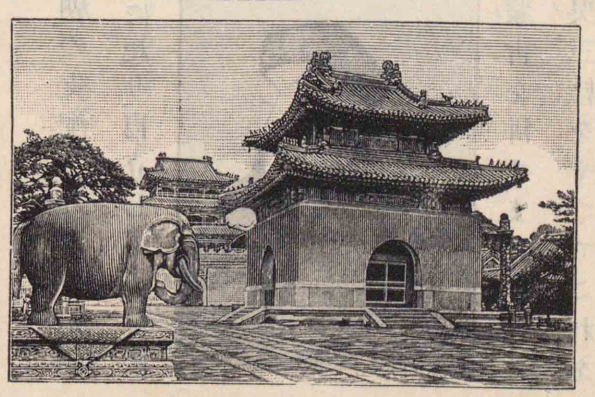
李自成の亂

山海關に防がしめたが、李自成といふもの、陝西に亂を起し、忽ち勢を得て、國都に亂入した。明軍これを防ぐことができないで、毅宗は自殺し、明は建國以來二百七十餘年で滅んだ（皇紀二三〇四年、後光明天皇の御代）。こゝに於て、吳三桂は清に降り、その援を得て、李自成を討つたので、清の世祖順治帝は、これを機として支那に進入し、都を今の北平に遷し、つひに支那を統一する基を立てた。

清の太宗の陵
奉天の北郊にあり一に北陵といふ



世祖の統一



漢族の反抗

鄭成功　かくて清は、辮髮の令を下して、漢族にも滿洲人の風俗を強ひたから、明人は、夷狄の風に從ふのを不面目とし、陰に陽に清に對して反抗した。中にも鄭成功は、明の遺臣の家に生れ、我が國人を母として、はじめ福建に居り、後オランダ人を逐ひはらつて臺灣に據り、力を明室回復のために盡したが、つひに志を果さなかつた。この頃明の遺臣が、我が江戸幕府や西國の諸大名を動かし、援を求めようとする企も行はれたけれど、つひにその實現を見るに至らず、隱元や朱舜水などのやうな氣節高き人々は、多く逃れて我が國に歸化した。

鄭成功の像
臺灣臺南市の開山神社（鄭成功をまつる）にある木像による

明の遺臣と我が國

聖祖・高宗の外征

清の邊境經略　世祖順治帝につぎ、聖祖康熙帝位につくや、當時雲南に封ぜられてゐた明の降將吳三桂等は、興明討虜と稱し、清にそむい

たので、聖祖は討つてこれを平げた。聖祖は更に外蒙古・チベットを從へ、臺灣の鄭氏をも服したが、その孫高宗[6]乾隆帝に至り、今の新疆地方を併せ、シャム・バルマ・安南をも朝貢國とした。ここに於て清の領土は、漢・唐二代にもまさり、漢・滿洲・蒙古・チベット・トルコ(回)の五大民族を含むに至り、尊大の風自ら生じて、外國を輕んずることゝなつたが、聖祖は、文武の才を兼ね、學德共に高く、公明の政治を行ひ、よくこれ等の民族を服せしめた。

聖祖康熙帝の像

清の五大民族

康熙・乾隆時代 聖祖[4]から高宗[6]に至る時代は、政治・制度が整備し、學藝が發達し、國運の隆盛・文化の進歩共に著しく、最もかゞやかしい時代をあらはした。世にこれを通稱して、康熙[コウキ]・乾隆[リウ]時代といひ、

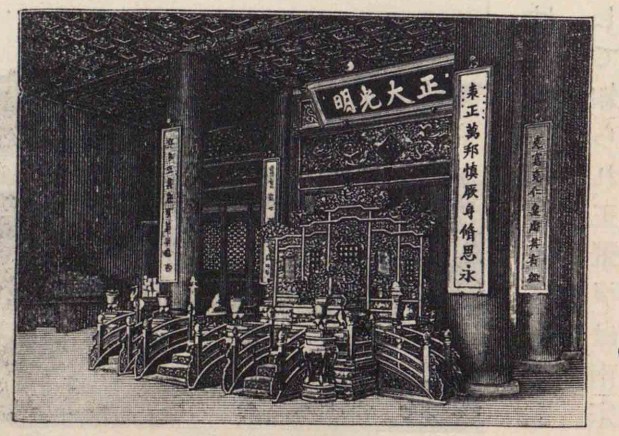
國運・文化の隆昌

清 (一) (十二世一二九七年)

太祖[1](天命)—太宗[2](天聰)(崇德)—世祖[3](順治)—聖祖[4](康熙)—世宗[5](雍正)—高宗[6](乾隆)

清の極盛期であつた。

制度の整備 清の中央政府は、初め明制により、內閣をして諸政を統[スベ]しめ、その下に吏・戶・禮・兵・刑・工の六部を置き、それぞれ政務を分掌[ブンショウ]せしめた。然るに邊境經略の必要から、高宗[6]以後軍機處[グンキショ]を設け、軍機處大臣を任じて、重要な政務にあづからしめたので、內閣の實權が、これに移ることゝなつた。地方は、支那本部を十八省に分ち總督・巡撫[ジュンブ]などを派して、軍政・民政を掌らしめ、滿洲は清朝の出た所で、特にこれを重んじた。



玉座

北平舊紫禁城內の正殿である乾清宮の玉座を示す、歲首などに群臣に宴を賜はる所で前掲太宗陵と共に天子の權力や尊嚴を物語つて居る

官制

地方制

考證學 清代に於ても、宋學がひきつゞき行はれたけれど、學者がとかく空理に走り、事實をおろそかにする風があつたから、清初

考證學

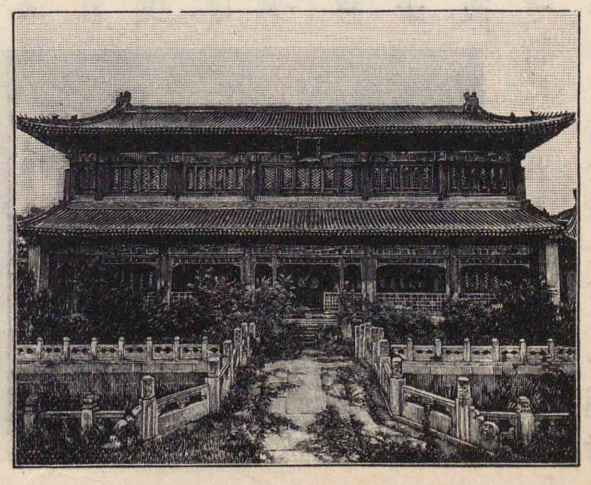
に顧炎武が出で、たしかな證據をあげて、事實を細かに考究する考證學を開いた。聖祖及び高宗は共に頗る學問を好み、知名の學者を集めて、勅撰の大著を編修せしめた。四庫全書の如きは、その代表的なもので、康熙字典は、我が國にもひろく行はれた。

顧炎武像

圖書編修

文學

文藝 文藝も康熙・乾隆時代に最高潮に達したが、概ね明代の風をつぎ、繪畫は清代に入り、花鳥畫の完成を見るに至り、惲壽平南田は、その名手として知られ、王翬石谷は南宗



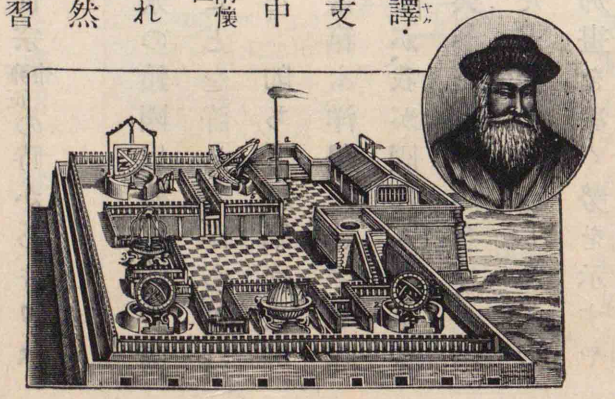
文淵閣（下）北平の舊紫禁城内にあり四庫全書を納む

繪畫

洋學の發達

畫に長じ、畫聖と稱せられた。またヨーロッパ人の渡來と共に洋畫の風も輸入せられ、寫照派と稱する實物寫生の一派が起り、イタリヤ人朗世寧は、康熙帝の頃、その道の達人として世に聞えた。

ヤソ教士の事業 明末から支那に來つて活動したヤソ教士は、清朝にも仕へて、ひきつゞき布教に從事すると共に、天文・數學・測量等の技を傳へ、曆法の改正・地理書の飜譯・地圖並に天文觀測機械の製作などを試み、支那に於ける洋學の發達に力をつくした。中にもアダム＝シャール湯若望・フェルビースト南懷仁等が名高く、これ等の人々の手に改造せられた觀象臺（天文臺）は、今も北平に遺つて居る。然るにその後渡來したヤソ教士は、支那の風習



觀象臺 北平にあり、元代の創立で清代に修築せられたものである、圖の隅に掲げたのはフェルビーストの肖像で觀象臺修築の功勞者である

キリスト教の禁令

を輕んじ、これを迷信として排斥したので、世宗雍正帝の時から、キリスト教を禁止することゝなつた。

清初の文化と日本　我が國に於ては、寛永の鎖國以後も、清の商船に對し、長崎に來航して、貿易をいとなむことを許したから、これ等の船舶を通じて、清の文化も輸入せられた。即ち考證學は我が國の儒學や史學に少からざる影響を與へ、書籍も洋學に關する譯書のうちには、輸入を禁ぜられたものもあるが、我が國に入り來つて、鎖國時代の人々に重要な世界的知識を與へたものが多い。南宗畫や花鳥畫の畫風も相ついで傳へられたが、後にはむしろその影響をうけて發達した日本畫が、却つて支那畫を凌ぐ勢を示すやうになつた。

第十九章　阿片戰爭　長髮賊　英・佛聯合軍の支那侵入

西力東漸の變遷

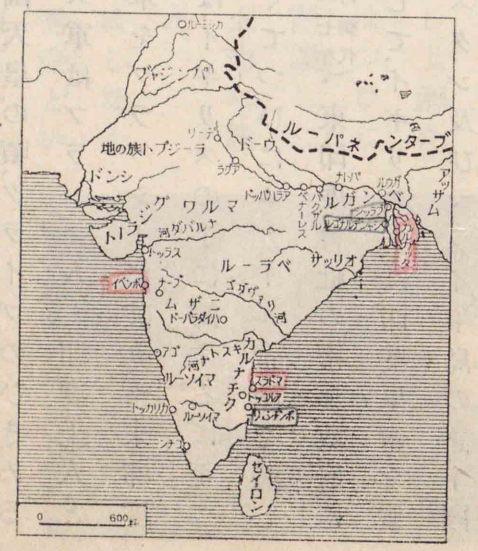
イギリスと印度

印度要圖

フランスと印度

西洋諸國の貿易・植民　明の中頃から端を發した西力東漸の勢は、その後益〻盛になり、ヨーロッパ諸國は、競うて商權をひろめ、植民地を得ようとした。特にポルトガル・イスパニヤは、漸く老境に入り、イギリス・ロシヤ・フランス等が、到る處に活動したが、當時、東洋諸國は概ね國勢振はず、やゝもすれば受身の姿を呈して、不利な地位に立つことが多かつた。

イギリスの印度經營　イギリス人は、東印度會社を立て（皇紀二二六〇年、後陽成天皇の御代）、東洋貿易に從事し、ムガール帝國の衰亡を機とし、マドラス・ボンベイ・カルカッタ等に據り、專ら印度を侵略した。この頃フランス人もまた東印度會社を起し、



ポンヂシェリーを根據地として、印度の經略を企てたから、英佛の間に、はげしい抗爭が起り、我が桃園天皇の頃、クライブのひきゐるイギリス軍は、フランス人と印度土人との聯合軍をプラッシーに破り、爾來印度の實權はイギリスの手に歸するに至つた。かくてつひにムガール帝國を滅し（皇紀二五一七年孝明天皇の御代）、東印度會社の權を政府に收め、明治九年以後、印度を帝國として、イギリス王は印度皇帝を兼ね、ついでバルマ（緬甸）を併せ、ベルチスタン及びマライ半島の諸小國をも、その保護下に置いた。

ブラッシーの戰

クライブの像

印度帝國

阿片戰爭　イギリス人の印度經營が進むにつれ、その手により、印度產の阿片が、支那に向け輸出せられることゝなつた。清廷では、阿片吸飲の害を認めて、度々これが禁令を發したけれど、その效

清と阿片

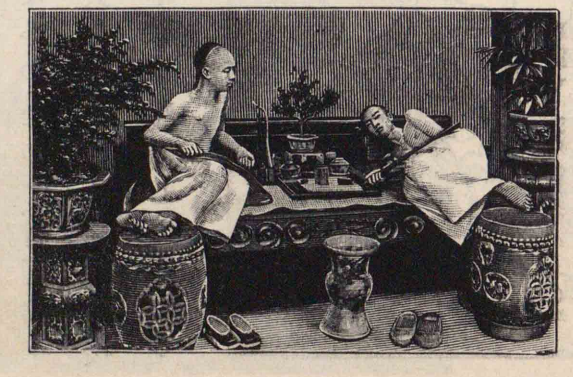
がなかつたので、宣宗道光帝は、林則徐を廣東に遣して、嚴にこれを取締らせた。彼は廣東在留の英商から、阿片を沒收して燒きすて、且つイギリス人の貿易を禁止したので、イギリスは、貿易保護を名として清に戰を開き、艦隊を以て廣東等の諸港を封鎖し、上海から南京に迫らうとしたので、清國はつひに屈して、南京條約を結び、（一）香港を割讓し（二）償金を出し、（三）廣東・厦門・福州・寧波・上海の諸港を開くことを約して、局を收めた。

阿片吸飲の圖

イギリスの開戰

南京條約

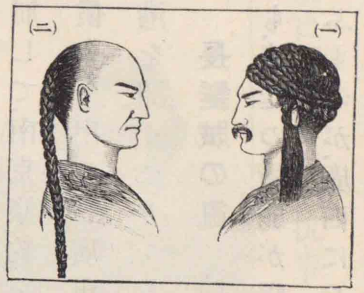
長髮賊の亂　阿片戰爭の結果、はしなくも、清廷の積弱が曝露したので、洪秀全といふものが、廣西に兵をあげ、進んで南京を略し、こゝに據つて、國を太平天國と號し、江南一帶を風靡する勢であつた。蓋し滿洲人を斥



太平天國

長髮賊

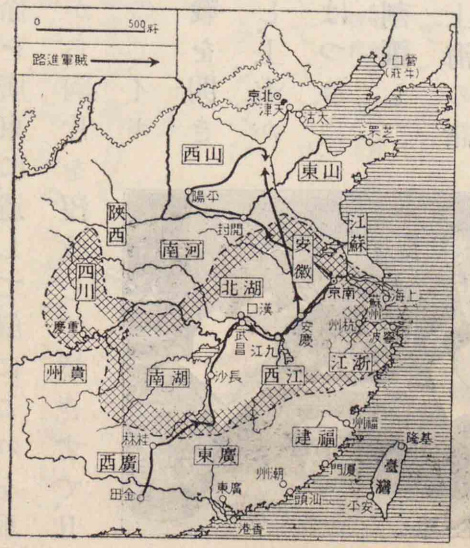
長髮と辮髮
(一)は長髮の賊軍を示し、(二)は辮髮を示す



け、漢族を興さんとするもので、清の風俗に反抗し、剃頭辮髮をしなかつたから、世呼んで長髮賊といふ。時に清の官兵は、これを平定し得なかつたので、曾國藩・李鴻章などの漢人が義勇兵を募り、これを討ち、後英人ゴルドン等、新式の軍隊を組織して、官軍を援けたので、南京遂に陷り、洪秀全は自殺した。

この大亂は、前後凡そ十五年に亘り、亂半ばに文宗(咸豐帝)が歿し、穆宗(同治帝)が僅かに七歲で帝位につき、生母西太后が攝政となつたが、清の國力は、漸く衰運に向つた。

太平天國要圖



清の衰運

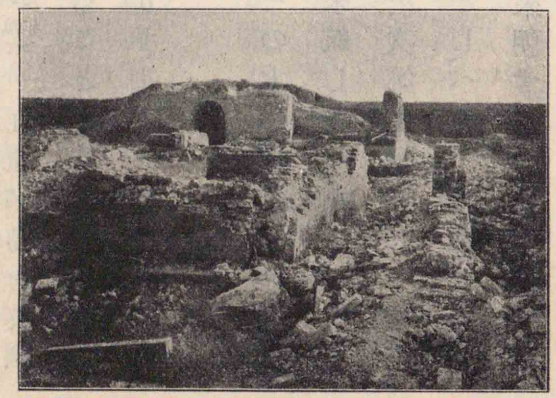
アロー號事件

フランス宣教師の難

圓明園址
北平の西郊にあり、康熙乾隆兩帝が民力を傾けて離宮を造營したが英佛聯合軍はこれを燒いて重寶を奪ひ爾來荒廢に歸した

英・佛聯合軍の支那侵入

さきに英・清兩國の間に、南京條約が結ばれたけれど、とかく感情の衝突が絕えなかつた。殊に廣東に於ては、罪を犯して外國船に逃れ、官の捕縛を免れる清人が多かつたから、清の官吏が、碇泊中の英船アロー號に臨檢して、罪人を捕へ、大いに英人を怒らしめた。この時フランス宣教師も、廣西省で殺されたので、英佛二國は、聯合艦隊を出動せしめ、廣東を陷れ、更に北上して天津に迫つた。清は、長髮賊の內亂に苦しみ、一時この外患を避けんとして、天津條約を結んだが(我が安政五年)、もとよりこれを實行する心がなかつたから、英佛聯合軍は、再擧して國都に迫り、圓明園の離宮を燒拂つて、威を示した。こゝに於て、清はいは



北京條約

ゆる城下の誓(チカヒ)をなして、北京條約を結び(我が萬延元年)、(一)九龍半島(キウリユウ)を英國に割譲し、(二)英佛二國公使の國都に駐在(チウザイ)することを許し、(三)兩國に償金を拂ひ、(四)漢口・牛莊(ニユウチヤン)等の港を新に開き、(五)キリスト教の内地布教を許すことを約した。

米清通商條約

日本の開國

米國と東洋　この頃アメリカ合衆國は、その太平洋沿岸地方の開發が進むにつれ、太平洋を越えて、東洋に來航した。かくてまづ清國と通商條約を結び(我が天保十三年)、その貿易が、次第に發展して來たので、往來の途次、我が國に寄港するのを便とし、ペリーを遣して、開國を求めしめた(我が嘉永六年)。ついでハリスが來朝するや、恰も英佛聯合軍の支那侵入があり、餘威を以て、我が國にも來り迫らんとする風説が傳はつたので、百方手をつくして、江戸幕府を動かし、つひに安政の假條約を結んだのであつた。

第二十章　ロシヤの東方經略と清・露の交渉　フランスの印度支那經營

ロシヤの獨立

シベリヤ侵略

ロシヤの東方經略　ロシヤは、バツの西征以來、久しくキプチャク汗國の支配をうけたが、モスコウ大公イヴァン三世に至り、つひにこれを滅して獨立した(我が後土御門天皇の御代)。その後凡そ百年を經て、南ロシヤのコサック部族の長エルマクといふもの、部下をひきゐて、東方のシベリヤを侵略(シンリヤク)した。かくてロシヤは、漸次東方に進出して、黑龍江流域に出で、太宗の末頃から、これが經略に着手したので、清と衝突することゝなつた。

清・露の交渉　この時に當り、清は南方平定に忙しかつたが、聖祖康熙帝に至り、國内統一の餘勢を以て、ロシヤとの交渉を行ひ、使臣を派して、ペートル大帝の使節と、ネルチンスク尼布楚に會見せしめ、ス

ネルチンスク條約

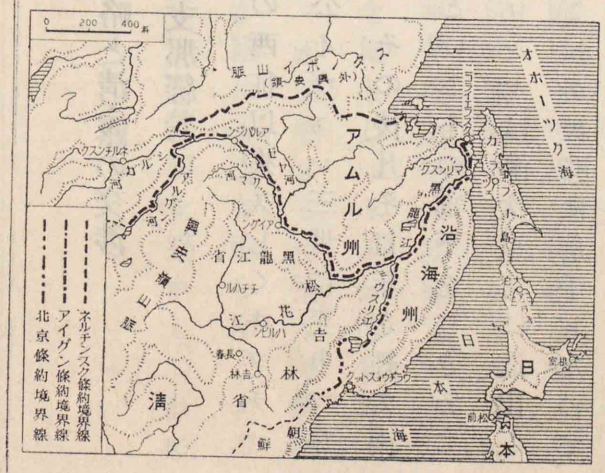
キャクタ條約

黑龍江附近要圖

愛琿條約

ムラヴィヨフの像

タノボイ山脈（外興安嶺）を兩國の境界とし、ロシヤ人を北滿洲から追ひはらつた。これをネルチンスク條約といひ、ロシヤの東侵は、一頓挫を生じた。そこでロシヤは、世宗（雍正帝）の時、清とキャクタ條約を結び、通商を約し、一時清の勢を避けて、カムチャッカ半島・アラスカ等を經略したが、その後、清に長髮賊の內亂が起り、これが平定になやむのに乘じ、東シベリヤ總督ムラヴィヨフは黑龍江流域地方を占領し、つひに清國に迫つて愛琿條約を結び、（一）黑龍江以北の地をロシヤに割



ウラヂウォストック港の建設

伊犂事件

英露の衝突

譲し、（二）ウスリー江東の地方を、兩國の共同管理と定めしめた（我が安政五年）。ついで英佛二國の聯合軍が侵入して、清が外患になやむのを見て、ロシヤはその間に仲裁し、これが報酬として北京條約を結び、ウスリー江東の地を併せ、そこにウラヂウォストック港を建設し、東方經營の根據地とした。そして我が國と交渉して、千島と樺太とを交換し（明治八年）、更にシベリヤ鐵道の布設に着手し（明治二十四年）、滿洲南下の地歩を固めた。

ロシヤの中央アジヤ侵略　かくロシヤは、東方經略の歩を進めると共に、更に今の中央アジヤをも侵略した。そして東部に於ては、清の伊犂に侵入して、伊犂事件をひき起し、償金を得て占領地を清に返した。また南部に於ては、ボカラ・キヴァ等を併せ、進んでアフガニスタン・パミール方面をうかゞつたので、印度の領有を確保せんとするイギリスの勢力と衝突し、これがために制せられて、つ

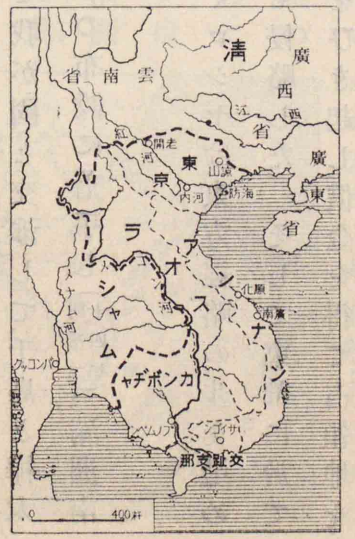
ひに印度洋進出を斷念し、專ら太平洋方面に勢力を張らうとするに至つた。

フランスの印度支那經營と清・佛戰爭　フランスは明末から多くの宣教師を送つて、安南地方にキリスト教を弘めたが、印度に於てイギリスに敗れてから、專ら印度支那の經營に力を注ぐに至つた。即ち自國の宣教師が危害をうけたのを口實として、まづ安南を攻め、交趾支那を奪ひ（我が文久二年）、翌年カンボヂャを保護國とし、更に居留民保護を名として、東京地方に兵をとゞめた。こゝに於て安南は、フランスと戰つたけれど利なく、つひにその保護國となつた（明治十六年）。然るに清國は、安南を自國の外藩なりとし、これに異議を唱へて、フランスに開戰し、互に勝敗をかさねたが、後和して、安南をフランスの手に委ねた（明治十八年）。かくてフランスは、これ等の地方を統一して、佛領印度支那と稱し、總督を派してこれを治めしめた。

印度支那要圖

フランスの安南攻略

清佛戰爭



佛領印度支那

近世史大要

近世期は、我が後水尾天皇の御代から明治二十七年に至り、支那では、清の興起から、日清戰役に至るまで、約二百八十年間（皇紀二二七六—二五五四）を含む。清は滿洲族から起り、新興の勢力を以て四方を從へ、よく漢族の文化をうけて、これを發達せしめた。けれどもその中原にとゞまること久しきに及び、漸く勢を失ひ、內憂外患こもごも起るに至つた。殊にヨーロッパ人の勢力が、著しく東洋を壓し、イギリス・フランス・ロシヤなどは、それぞれ廣大な土地を侵略して、その根據地をつくり、清もこれがために壓迫をうけ、大いに國威を傷つけることゝなつた。

第五篇　現代

第二十一章　清國と我が國

日本の明治維新

朝鮮の開國　西洋諸國が相競うて、アジヤの經略を志すのに刺戟せられ、我が國は、早く國を開いて、西洋の文物・制度を輸入し、明治維新の大業を進め、國力が次第に進んで來た。　然るに清國は、當初の強大をたのみ、自負・自尊の念強く、つひに事を構へて、我が國と衝突するに至つた。　これよりさき朝鮮は、江戸時代の初から、我が國と交通したが、清に對しても事大の禮をとり、これに臣事して屬國の扱ひをうけた。　明治維新後、我が政府は、朝鮮に開國・通商をすゝめたけれど、國王李熙の父大院君李昰應が政を攝し、固く鎖國主義をとり、我が國に對しても屢〻無禮なことがあつた。　明治九年に至り、

大院君

事大黨と獨立黨

大院君の像　朝鮮の官服をつけたもので下は白衣、上は絹の黑衣である

我が國は朝鮮の獨立を認めて、通商條約を結んだが、その後朝鮮には、清國にたより、國家を維持せんとする事大黨と、我が國に親しみ、我にならつて制度・文物の改新をはかり、獨立の實をあげようとする獨立黨とが對立し、互に勢力を爭ひ、たびたび變亂を起した。

日清通商條約

日清の交戰　支那と我が國との國交は、室町時代の末頃から絶えてゐたが、明治四年兩國の間に通商條約が成立した。　然るに清國は、朝鮮を屬邦視して、その政治の改新をも妨げる有樣であつたから、明治十八

景福宮　京城にあり、朝鮮太祖の造營にかゝり後燒けて久しく廢絶、今のものは大院君により復興せらるゝ、こゝに示したのはその正殿なる勤政殿である

天津條約
東學黨の亂

年、我が國は伊藤博文を清國に遣し、李鴻章と天津に會見せしめ、清國をして、朝鮮の獨立を認め、爾後協同して、朝鮮に關する事を處理すべき旨を約せしめ、東洋の禍亂を未然に防がんとする、天津條約を結ばしめた。その後、明治二十七年に至り、朝鮮に東學黨の亂起るや、清は天津條約を無視し、屬國の難を救ふと稱して大兵を朝鮮に送り、我を威壓しようとした。こゝに於てか兩國の國交が破れ、我が國は上下一致、當時眠れる獅子として、世界に恐れられた大國清を相手に奮戰し、海に陸に大勝を博したから、清國は、李鴻章を遣して和を請ひ、(一)朝鮮の獨立を認め、(二)償金二億兩を出し、(三)臺灣及び遼東半島を割讓することを約した。これを下關條約といふ。時にロシヤは、極東經略に全力を注ぎ、ひそかに滿洲に南

李鴻章の像

日清の交戰

下關條約

三國干涉

下せんとする野心を抱いて居たから、ドイツ・フランスと聯合して、我が國の遼東半島領有に異議をとなへ、その還附を勸めたので、我が國は、東洋平和のため、深く時局の大勢を察し、隱忍してこれを清國に還した。

フランス
トイツ
ロシヤ
イギリス

第二十二章　清國と歐米列强との關係

清國の革新

列强の清國壓迫　日清戰役後、列强は清國の積弱無力を看破し、これを壓迫して、自國の勢力範圍を定めようとした。即ちフランスは、佛領印度支那に近い廣東・廣西・雲南三省の鑛山採掘權を得、ついで廣州灣(廣東)を租借し、ドイツは、その宣教師が殺されたのを口實として、膠州灣(山東)を租借し、山東地方に鐵道・鑛山等の利權を得、ロシヤは、無遠慮に遼東半島の旅順・大連を租借し、滿洲鐵道の敷設權を得た。こゝに於てイギリスも、威海衞(山東)を租借したので、一時は支

門戸開放・機會均等

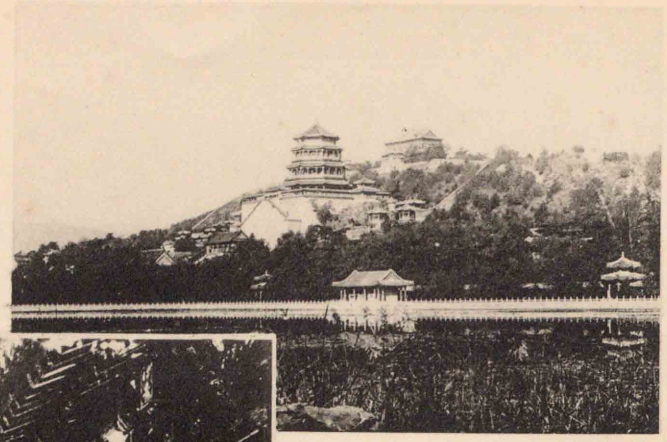
那分割の說さへ行はれた。當時アメリカ合衆國は、スペインと開戰して、フィリッピン群島を攻略し、支那に對する利權競爭に參加することができなかつたから、支那の門戸開放と、商業經濟上の機會均等主義をとなへ、我が國も未だ獨力で、かゝる急迫した時局を解決する實力がなかつたので、自衞の必要上、福建省の不割讓を約せしめ、東洋平和の維持と、支那の保全とに力をつくした。

德宗の像（上）

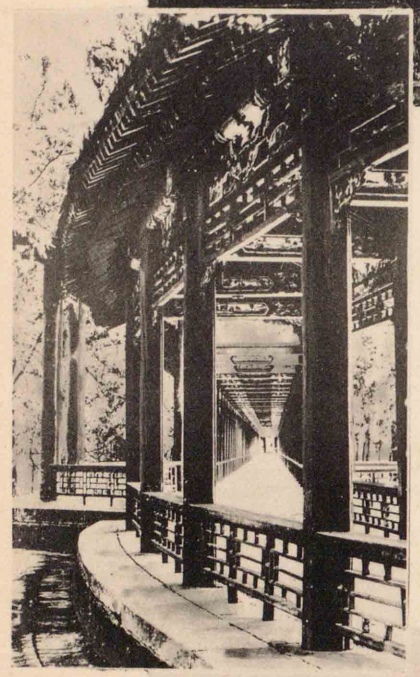
康有爲の像（下）

清國の改革運動　かゝる險惡な形勢にかんがみ、清國の上下には、國政改革の運動が起つた。康有爲は、我が明治維新にならひ、制度を改め、國力を強

萬壽山離宮

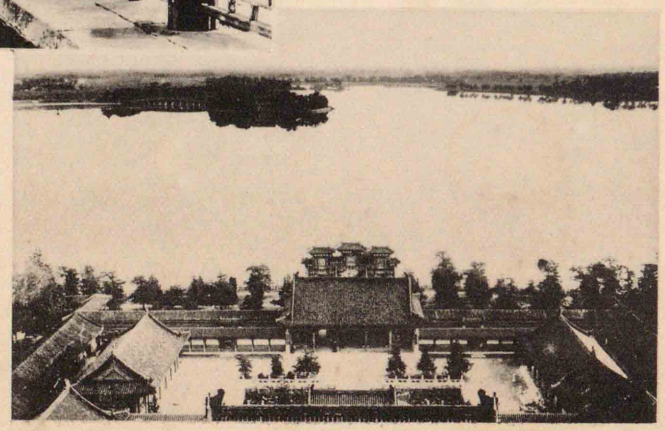


佛光閣



長廊

今の萬壽山離宮は主として清の高宗及び西太后の造營したものである。佛光閣を中心とし、その山腹から昆明湖畔にかけて、多くの建物が配置せられ、これを連結する長廊は、桂その他が色彩繪畫を以て美しく裝飾せられてゐる。



昆明湖

變法自强

くせんとする變法自强の說を唱へ、屢、上書したので、德宗光緒帝はこれを用ひて、改革を斷行せんとしたが、西太后等の守舊派のために妨げられ、西太后は、德宗を幽して自ら政を聽き、康有爲等は國外に逃れ、排外守舊の氣運が盛になつた。

西太后の像

改革の失敗

排外的暴動

義和團の亂　明治三十二年、義和團と稱する排外主義の暴徒が、山東省に蜂起するや、官兵これに加はり、端郡王等の王族大官も、暗にこれをそゝのかしたから、次第に勢を得、翌年今の北平に入り、列國公使館を攻圍した。そこで列國は、聯合軍を組織し、大沽を陷れ、天津から北平に進入したので、德宗・西太后は西安にのがれ、慶親王等をして、列國と和を講ぜしめ、償金を出し、謝罪使を送ることを約し、列國は北平に兵を駐めて、公使館を保護することゝなつた。

列國との和議

ロシヤの滿洲占領

日英同盟

日露交戰

ポーツマス條約

日露戰役　さきに朝鮮は、我が國の力により、獨立を全うし、國號を韓と改めたが(明治三十年)、義和團の亂起るや、ロシヤは滿洲鐵道の保護を名とし、大兵を出して、滿洲の要地を占領し、更に韓國の北境をもおびやかすに至つた。　我が國は、東洋平和の維持と、清・韓兩國の領土保全とを根本國策とし、明治三十五年イギリスと同盟を結び、屢、ロシヤに忠告したけれど、ロシヤは却つて海陸の軍備を增大し、以て我を屈從せしめんとした。　こゝに於て我が國は、自衞上やむを得ず開戰し(明治三十七年)、世界の强大國として、自他共に許したロシヤを擊ち破り、つひにポーツマス條約を結び、(一)韓國に於ける我が優越權を認めしめ、(二)旅順・大連一帶の租借權及び樺太の南半を讓らしめた。　この戰役は、たゞにロシヤの滿洲侵略の野心を挫いたのみならず、世界の形勢及び東洋人の精神に大影響を與へ、我が國は、東洋の盟主として、治安維持の鍵を握るに至つた。　卽ち滿洲を世界の市場として、門戶開放の實をあげ、韓國を保護國とし、ついで兩國、永遠の福利のためこれを併合し(明治四十三年)、半島の蒼生をして、文明の惠澤に浴せしむることゝなつた。

日韓併合

憲政準備

宣統帝

清國の革新　清國は、我が國の急激な發展にかんがみ、その原因を立憲政治の結果に歸し、憲法を發布して國會を開き、國政を革新して國力を養ひ、以て外國から奪はれた利權を回收せんとするに至つた。　こゝに於て我が國にならひ、諸般の制度を改革し、張之洞を擧げて、憲政の準備に當らせた。

然るに間もなく德宗・西太后相ついで死し、宣統帝が、わづか三歲で帝位をつぎ、父醇親王が攝政となつて、鋭意國事に當り、改新の實を擧げようとしたけれど、張之洞もついで死し、もはや漢人の心をつ

清(二)

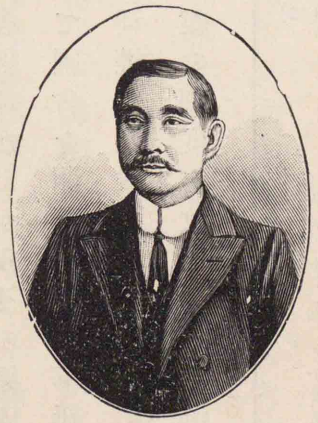
高宗(乾隆)6 — 仁宗(嘉慶)7 — 宣宗(道光)8 — □ — 德宗(光緒)11 — 醇親王 — 宣統帝12

宣宗 — 文宗(咸豐)9(西太后) — 穆宗(同治)10

なぐこと能はず、つひに革命を見るに至つた。

第二十三章　中華民國

革命の勃發　清は滿洲から起つて、支那全土を支配したが、漢族は、異民族の支配をうけるのを快しとせず、倒滿復明の思想が、絶えず流れて居た。[11] 德宗の代に至り、廣東の孫文逸仙は同志を集めて興中會を組織し、我が國及び歐米を漫遊して、到る處支那留學生間に革命思想を鼓吹し、支那內部の革命黨とも氣脈を通じ、その勢が漸く盛になつた。たま〳〵政府が鐵道國有計畫を立て、地方人民はこれに反對して、物情頗る不穩になつたので、革命黨は、兵を武昌(湖北)に擧げ、黎元洪を首領に戴い

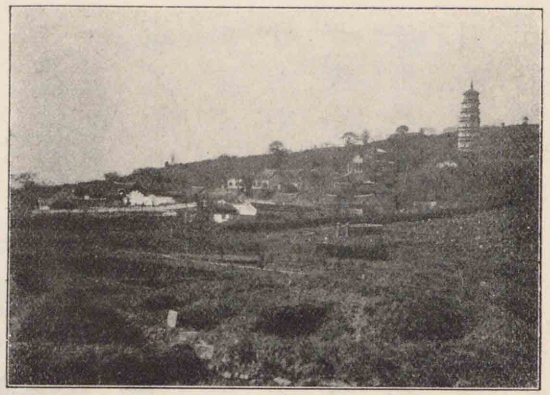


孫文の像

孫文—興中會

鐵道國有問題

革命の勃發



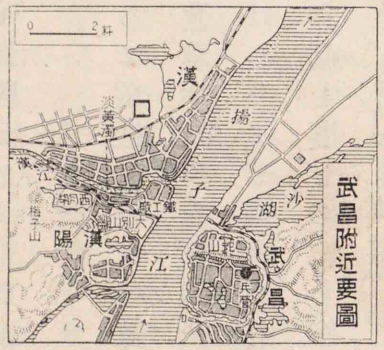
武昌の蛇山

革命軍が最初の烽火を擧げた所で圖に見える寺は八寶寺といふ

南京の假共和政府

たが(明治四十四年)、全國忽ちこれに響應し、清廷は狼狽の餘、漢人袁世凱を起用して、討伐の事に當らしめた。かゝる間に革命軍は、南京を略して、假共和政府を樹立し、孫文を迎へて假大總統とした。

清の滅亡　こゝに於て醇親王は、騷亂の責を負ひ、攝政の位を退き、國政を袁世凱に委ねたから、袁世凱は、孫文と交渉して時局を收拾し、清帝は、民意に從ひ、退位することゝなつた(明治四十五年)。かくて清は、支那に君臨すること約二百七十年にして滅び、翌年新共和國の國會が、今の北平に開



武昌附近要圖

清帝退位

中華民國

かれ、袁世凱が選ばれて、正式大總統となり、中華民國がこゝに成立たし。

袁世凱の帝制運動

民國の動揺　然るに袁世凱の大總統となるや、孫文等の舊革命黨員を壓迫し、專ら權勢の擴張をはかり、まづ國會を停止し(三年)、ついで共和制を廢して、自ら帝位に卽くべきことを宣言した(四年)。こゝに於て、共和擁護を名とし、討袁軍を起すもの多く、さすがの袁世凱も、大勢に抗し難く、つひに目的を果さず、幾くもなく病死した(五年)。この後北平に於ては、黎元洪・馮國璋・徐世昌・曹錕などが、相ついで大總統となつたけれど、安徽派の段祺瑞・直隸派の吳佩孚・奉天派の張作霖など、軍閥の勢力を制する能はず、結局張作霖が、北平に軍政府を立て、大元帥として北支那を支配した(二年)。かゝる間に南方の人々は、廣東に軍政府を起し、孫文を大元帥に推したが(六年)、ついでこれを正式政府と稱し、孫文を大總統とし(十年)、南北分立の姿を呈しつゝ幾變轉をかさねた。

袁世凱の像

北方の政局

南方の形勢

我が國の國策

民國と我が國との關係　日露戰役以後我が國は、フランス・ロシヤ・アメリカ合衆國等と約して、東洋平和の維持につとめ、また日英同盟を改訂して、ひたすら國策の實行をはかつた。然るに中華民國成立するや、列國はこれに資金を貸附けて、各種の利權を得んとし、支那は再び分割の危機に直面した。そこで我が國は、極力この形勢の緩和をはかり、大正三年世界大戰勃發するや、日英同盟の誼により、起つて東洋の戰雲を一掃し、ドイツの根據地膠州灣を略し、日支條約を結んで形勢の變化にそなへ(四年)、更に民國にすゝめ聯合國に味方して、世界大戰に參加せしめ、戰後有利な國際的地歩を占めさせようとはかつた(六年)。然るに民國の政情がとかく安定

世界大戰と我が國及び中華民國

ワシントン會議

を缺き、我が國策の眞意も、やゝもすれば誤解をうけ、昔ながらの夷を以て夷を制する策を弄し、太平洋方面に密接な關係をもつ國々を誘ひ、我が國に當らうとする氣勢を示すに至つた。それにも拘らず、我が國は、東洋全局の大勢を察し、大正十年アメリカ合衆國の主唱により、ワシントン會議が開かるゝや、喜んでこれに參加し、英・米・佛の三國と共同して、太平洋方面の平和確保の協約を結び、支那に關しては、その國權を尊重し、國力の伸張を援助するため、各種の決議をなし、また我が國の占有中であつた膠州灣を、民國に還附し、山東地方は、我が國の手により、再び支那の治下に歸することゝなつた。

國民黨

國民政府の統一　さきに孫文が廣東に據るや、そのひきゐる國民黨の結束を固め、鋭意革命の實を擧げようとしたが、終に志を果さないで歿した（大正十四年）。けれどもその主唱した三民主義は、次第

蔣介石の北伐

民國の統一

に民衆の共鳴を得たので、國民黨の人々は、更に國民革命軍を編制し、蔣介石の統率のもとに北伐を企て、漸次北方を壓し、南京に統一政府を立てた（昭和三年）。當時北平にとゞまり、北支那を支配して居た張作霖も、その地位に不安を感じ、奉天に退去するの途、不慮の死を遂げ、その子張學良は、蔣介石と和したので、支那は、ほゞ國民政府の手に統一せられた。けれども政府の基礎が固まらぬうちに、いたづらに外國と事を構へるやうな態度をとり、滿洲に於ける我が國の利權をくつがへさうとして、つひに我が國と衝突した。されば惡政になやみぬいた滿洲人は、これ等舊政權に反抗し、さきに退位した宣統帝溥儀を執政に迎へ、新しく

溥儀の像

獨立國家(滿洲國)を建つるに至つた。要するに支那の政情の不安定は、東洋の平和に至大な暗影を投(ナ)げかけるものである。

我が國民の覺悟　明治維新以來、上下一致不斷の努力により、今や我が國は、東洋の政局並びに文化に對し、極めて重要な地位を占めることゝなつた。そして我が國の一擧一動は、ひいて東洋全局に波動を及ぼし、その禍福の命運をも左右するやうになつた。然るにひるがへつて東洋の現狀を見るに、概ねその國力充實の前途遠く、しかも久しきに亘(ワタ)る西洋諸國のアジヤ經營は、更に一層の勢力を張らんとしてゐる。故に我等は、內國力の充實をはかり、外は先覺者たるの度量を以て、これ等友邦に好(ヨシミ)をつくし、その國民の安全と幸福とをはかり、共存共榮の實をあげなければならぬ。東洋永遠の平和を確保して、世界人類の發達に貢獻することは、新日本の女性の重大な使命である。

現代史大要

現代期は、日清戰役から現今に至る約四十年間をいふ。この期は、日本勃興時代とも稱すべく、我が國は、東洋の一隅に位しながら、上下一致の努力により、世界の一大强國となつた。これがために東洋の大勢は、殆ど日本の指導する所となり、その領土の保全・治安の維持・文化の發達など、一にかゝつて我が國民の努力にまつことゝなつた。かゝる我が國運の急激な發展は、一方にいはゆる排日運動の如き、思はしからざる事件をも生じたけれど、アジヤ諸國が、競うて我が國にならひ、內外の政弊を革新し、國運を復興して、その自治獨立を全うし、以てアジヤ人のアジヤを建設せんとする氣運が動いて來た。この意味に於て、現代はアジヤ復興の黎明(レイメイキ)期である。

新編女子東洋史　終

古

唐

1278—1567

一二七八（推古）李淵帝位に卽く
一二八六（推古）太宗卽位
一三〇四（皇極）太宗の高句麗征伐
一三一一（孝德）高宗の時大食來り通ず
一三二三（天智）高宗百濟を滅す
一三二八（天智）高宗高句麗を滅す
一三五〇（持統）武后帝位に卽き國を周と號す
一三七三（元明）大祚榮渤海國を建つ
一四一五（孝謙）玄宗の時安祿山反す
一五六七（醍醐）唐亡ぶ

近古

五代

1567—1620

一五六七（醍醐）朱全忠帝位に卽く（後梁）
一五七六（醍醐）契丹自立（遼）
一五七八（醍醐）王建の高麗建國
一六二〇（村上）後周亡ぶ

北宋

1620—1787

一六二〇（村上）趙匡胤帝位に卽き宋國を建つ
一六三九（圓融）太宗の一統
一六六四（一條）澶州の役
一七二九（後三條）神宗王安石を用ふ
一七七五（鳥羽）女眞のアクダ帝と稱す（金）
一七八五（崇德）遼亡ぶ
一七八七（崇德）靖康の變

現代

中華民國

2572—

二五五四（明治）日清開戰
二五五五（明治）バミール問題解決
二五五八（明治）獨露英三國清の港灣を租借す
二五五九（明治）佛國廣州灣を租借す。義和團の亂起る
二五六二（明治）日英同盟成る
二五六四（明治）日露開戰
二五六八（明治）德宗及び西太后歿す
二五七〇（明治）日韓の併合
二五七一（明治）南支那に革命軍起る
二五七二（明治）明治天皇崩御。清の滅亡
二五七二（明治）中華民國起る
二五七三（大正）袁世凱大總統となる
二五七四（大正）世界大戰。日獨開戰
二五七五（大正）日支條約成る
二五七六（大正）袁世凱死し黎元洪大總統となる
二五七七（大正）支那獨墺二國に宣戰す
二五七八（大正）徐世昌大總統となる
二五八二（大正）ワシントン會議終る
二五八三（大正）曹錕大總統となる
二五八八（今上）國民軍北伐完成
二五九〇（今上）ロンドン海軍條約成る

東洋史年表

（年代は皇紀に據る）

時代	王朝	年代（天皇）	重なる事蹟
上古	堯	前二六〇頃	堯の卽位
	舜	前二〇〇頃	舜の卽位
	夏 前1540頃—前1100頃	前二四〇頃	禹の卽位
		前二〇〇頃	夏の滅亡
	殷 前1100頃—前460	前二〇〇頃	湯の卽位
		前四六〇	殷の滅亡
	周 前460—440	前四六〇	武王の卽位○古朝鮮興る
		前一一〇	周室の東遷
		前二五	齊の桓公立つ
	戰國	九八頃（綏靖）	釋迦生る（一七六入滅）
		一〇九（綏靖）	孔子生る（一八二死）
		二八九頃（孝安）	孟子生る（三七二死）
		三二八（孝安）	蘇秦六國を合從す
		三五〇（孝安）	張儀の連衡策成る
		三九二頃（孝靈）	アショカ王の卽位（四二九頃死）
	秦	四〇五（孝靈）	周の滅亡

時代	王朝	年代（天皇）	重なる事蹟
近	南宋 1787–1939	一七八七（崇德）	宋室南渡
		一八〇一（崇德）	宋金と和す
		一九三九（後宇多）	南宋亡ぶ
	蒙古（元） 1866—2028	一八六六（土御門）	テムヂン大汗の位に卽く
		一八七九（順德）	ヂンギス汗の西征
		一八八五（後堀河）	チャガタイ汗國建設
		一八九四（四條）	金の滅亡
		一八九七（四條）	バツのロシヤ侵入
		一九〇三（後嵯峨）	キプチャク汗國建設
		一九一四（後深草）	フラグの西征
		一九一八（後深草）	イル汗國の建設
		一九二〇（龜山）	忽必烈の卽位
		一九三五（後宇多）	マルコ＝ポーロ支那に來る
		一九三九（後宇多）	南宋の滅亡
		一九四一（後宇多）	弘安の役
		二〇二八（後龜山）	元の滅亡
	明	二〇二八（後龜山）	明の太祖卽位

古

周 前460—440

春秋

- 前四六〇　武王の卽位○古朝鮮興る
- 前四六〇　周室の東遷
- 前一一〇　齊の桓公立つ
- 前二五　釋迦生る（一七六入滅）
- 九八頃（紀元前）　孔子生る（一八二死）
- 一〇九（紀元前）　孟子生る（三七二死）
- 二八九頃（紀元前）　蘇秦六國を合從す
- 三五〇（紀元前）　張儀の連衡策成る
- 三九二頃（紀元前）　アショカ王の卽位（四二九頃死）
- 四〇五（紀元前）　周の滅亡
- 四四〇（紀元前）　秦の一統

中

秦 440—455

- 四四〇（孝靈）　天下統一
- 四五二（孝元）　項羽劉邦等兵を起す
- 四五五（孝元）　秦亡ぶ

前漢 459—668

- 四五九（孝元）　垓下の戰。劉邦帝位に卽く
- 四六七（孝元）　衞滿朝鮮王となる
- 五二三（開化）　張騫西域に使す（五三九再使）
- 五四〇（開化）　武帝匈奴を伐つ
- 五五三（開化）　武帝朝鮮を滅す
- 六〇四（崇神）　新羅建國
- 六二四（崇神）　高句麗建國
- 六四三（垂仁）　百濟建國
- 六六八（垂仁）　王莽の簒立

後漢 685—880

- 六八五（垂仁）　劉秀帝位に卽く
- 七二七（垂仁）　蔡愔大月氏より佛法を求め歸る
- 八〇〇頃（成務）　大月氏のカニシカ王卽位
- 八二六（成務）　大秦國との交通開く
- 八六八（應神）　赤壁の戰
- 八八〇（應神）　後漢亡ぶ

三國 880—940

- 八八〇（應神）　曹丕魏國を建つ
- 八八一（應神）　蜀漢の劉備皇帝と稱す（九三滅亡）
- 八八九（應神）　吳の孫權帝と稱す
- 九二五（應神）　司馬炎魏の位を奪ひ晉を建つ
- 九四〇（應神）　晉、吳を滅して天下を統一す

西晉 925—976

- 九四五（應神）　漢學我が國に傳來す
- 九七六（仁德）　西晉の滅亡

東晉 977—1080

- 九七七（仁德）　東晉の元帝位に卽く
- 一〇三二（仁德）　佛敎高句麗に入る
- 一〇四三（仁德）　淝水の戰
- 一〇四四（仁德）　佛敎百濟に入る
- 一〇八〇（允恭）　東晉亡び宋起る

南北朝 1080—1249

- 一〇九九（允恭）　後魏の江北統一
- 一二一二（欽明）　佛敎我が國に傳來す
- 一二二二（欽明）　新羅、任那の日本府を滅す
- 一二四九（崇峻）　隋の南北支那統一

隋 1241—1278

- 一二六七（推古）　小野妹子隋に使す
- 一二七八（推古）　隋亡ぶ

唐 1278—1567

- 一二七八（推古）　李淵帝位に卽く
- 一二八六（推古）　太宗卽位
- 一三〇四（皇極）　太宗の高句麗征伐
- 一三一一（孝德）　高宗の時大食來り通ず
- 一三二三（天智）　高宗百濟を滅す
- 一三二八（天智）　高宗高句麗を滅す
- 一三五〇（持統）　武后帝位に卽き國を周と號す
- 一三七三（元明）　大祚榮渤海國を建つ
- 一四一五（孝謙）　玄宗の時安祿山反す
- 一五六七（醍醐）　唐亡ぶ

近古

五代 1567—1620

- 一五六七（醍醐）　朱全忠帝位に卽く（後梁）
- 一五七六（醍醐）　契丹自立（遼）
- 一五七八（醍醐）　王建の高麗建國
- 一六二〇（村上）　後周亡ぶ

北宋 1620—1787

- 一六二〇（村上）　趙匡胤帝位に卽き宋國を建つ
- 一六三九（圓融）　太宗の一統
- 一六六四（一條）　澶州の役
- 一七二九（後三條）　神宗王安石を用ふ
- 一七七五（鳥羽）　女眞のアクダ帝と稱す（金）
- 一七八五（崇德）　遼亡ぶ
- 一七八七（崇德）　靖康の變

近古

（元） 1866—2028

- 一八九七（四條）　バツのロシヤ侵入
- 一九〇三（後嵯峨）　キプチャク汗國建設
- 一九一四（後深草）　フラグの西征
- 一九一八（後深草）　イル汗國の建設
- 一九二〇（龜山）　忽必烈の卽位
- 一九三五（後宇多）　マルコ＝ポーロ支那に來る
- 一九三九（後宇多）　南宋の滅亡
- 一九四一（後宇多）　弘安の役
- 二〇二八（後龜山）　元の滅亡

明 2028—2304

- 二〇二八（後龜山）　明の太祖卽位
- 二〇二九（後龜山）　チムール中央アジアを定む
- 二〇五二（後龜山）　李成桂朝鮮王となる
- 二〇六二（後小松）　成祖の卽位。アンゴラの戰
- 二一五八（後土御門）　ヴァスコ＝ダ＝ガマ印度に達す
- 二一七〇（後柏原）　ポルトガル人ゴアを略取す
- 二一七七（後柏原）　ポルトガルの使節始て明に來る
- 二一八六（後柏原）　バベル、ムガール帝國を建つ
- 二二〇二（後奈良）　サヴィエル、ゴアに來る
- 二二一六（後奈良）　アクバル大帝の卽位
- 二二一七（後奈良）　ポルトガル人澳門に商館を置く
- 二二二五（正親町）　イスパニヤ人のフイリツピン諸島占領
- 二二三九（正親町）　英人始めて印度に航す
- 二二四一（正親町）　マテオ＝リッチ明に來る
- 二二五二（後陽成）　神宗の時豐臣秀吉朝鮮を伐つ
- 二二六〇（後陽成）　英人東印度會社を建つ
- 二二七六（後水尾）　ヌルハチ帝位に卽く
- 二二七九（後水尾）　蘭人バダヴィヤに據る
- 二二八四（後水尾）　蘭人臺灣を占領す
- 二二九六（明正）　滿洲の太宗國號を清と改む
- 二三〇四（後光明）　李自成北京を陷る

近世

清 2276—2572

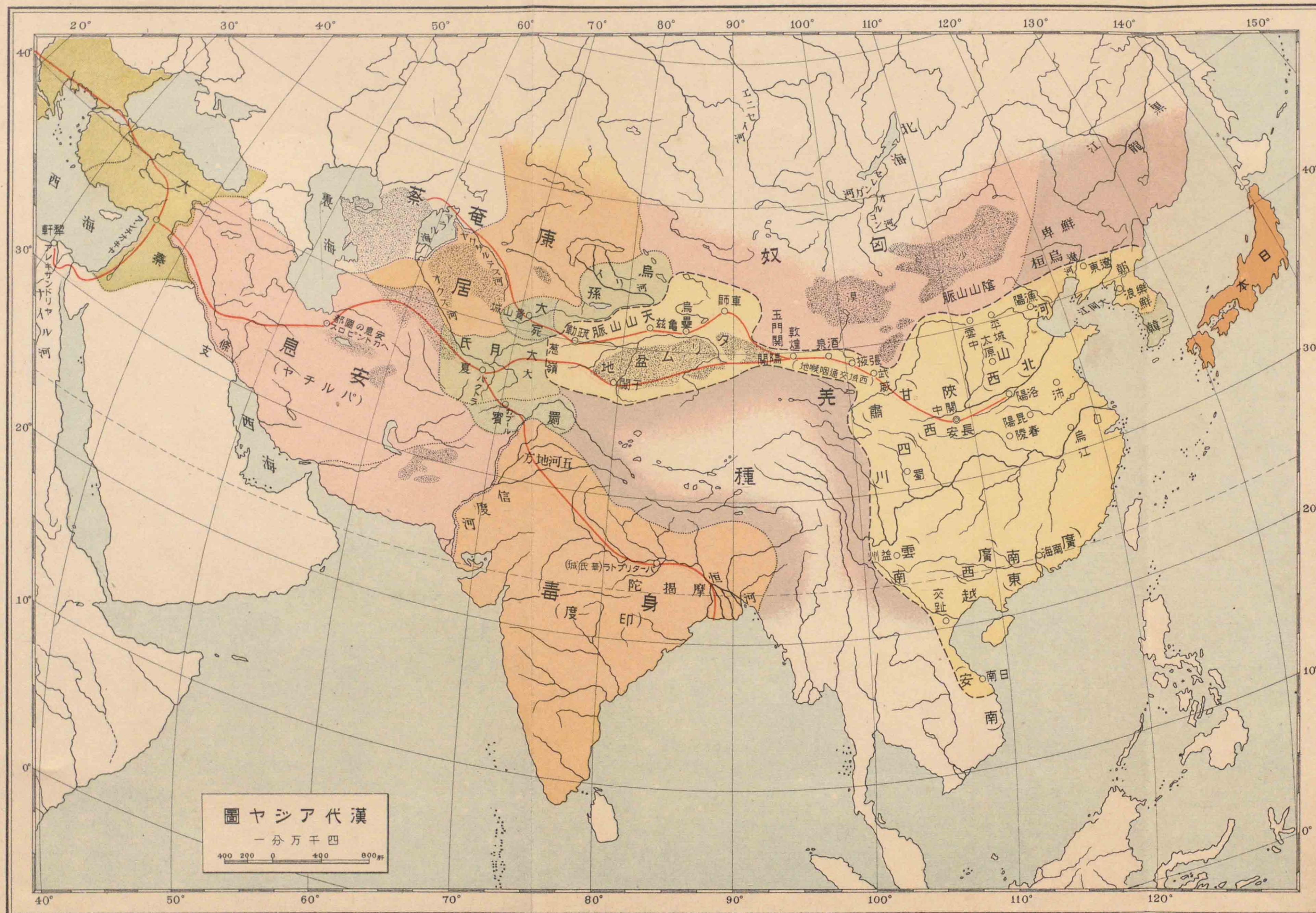
- 二三〇四（後光明）　世祖都を北平に遷す
- 二三〇五（後光明）　辮髮の令を下す
- 二三二一（後西）　鄭成功臺灣に據る
- 二三三三（靈元）　吳三桂等反す
- 二三四三（靈元）　臺灣清領となる
- 二三四九（東山）　ネルチンスク條約成る
- 二三八七（中御門）　キヤクタ條約成る
- 二四一七（桃園）　プラッシーの戰
- 二四九九（仁孝）　林則徐の阿片燒棄
- 二五〇二（仁孝）　阿片戰役の結果南京條約成る
- 二五〇七（孝明）　ムラヴィヨフ東部シベリヤ總督となる
- 二五一〇（孝明）　長髮賊の亂起る（二五二四平定）
- 二五一七（孝明）　英佛聯合して清と開戰す。ムガール帝國滅ぶ
- 二五一八（孝明）　愛琿條約成る
- 二五二〇（孝明）　英佛聯合軍北京を陷る。ロシヤウスリー江東の地を得
- 二五二三（孝明）　カンボチヤ佛國の保護國となる
- 二五二七（孝明）　朝鮮王李熙（李太王）立つ
- 二五三五（孝明）　明治天皇踐祚
- 二五三五（孝明）　千島樺太交換
- 二五四一（孝明）　伊犁條約成る
- 二五四四（孝明）　清佛開戰

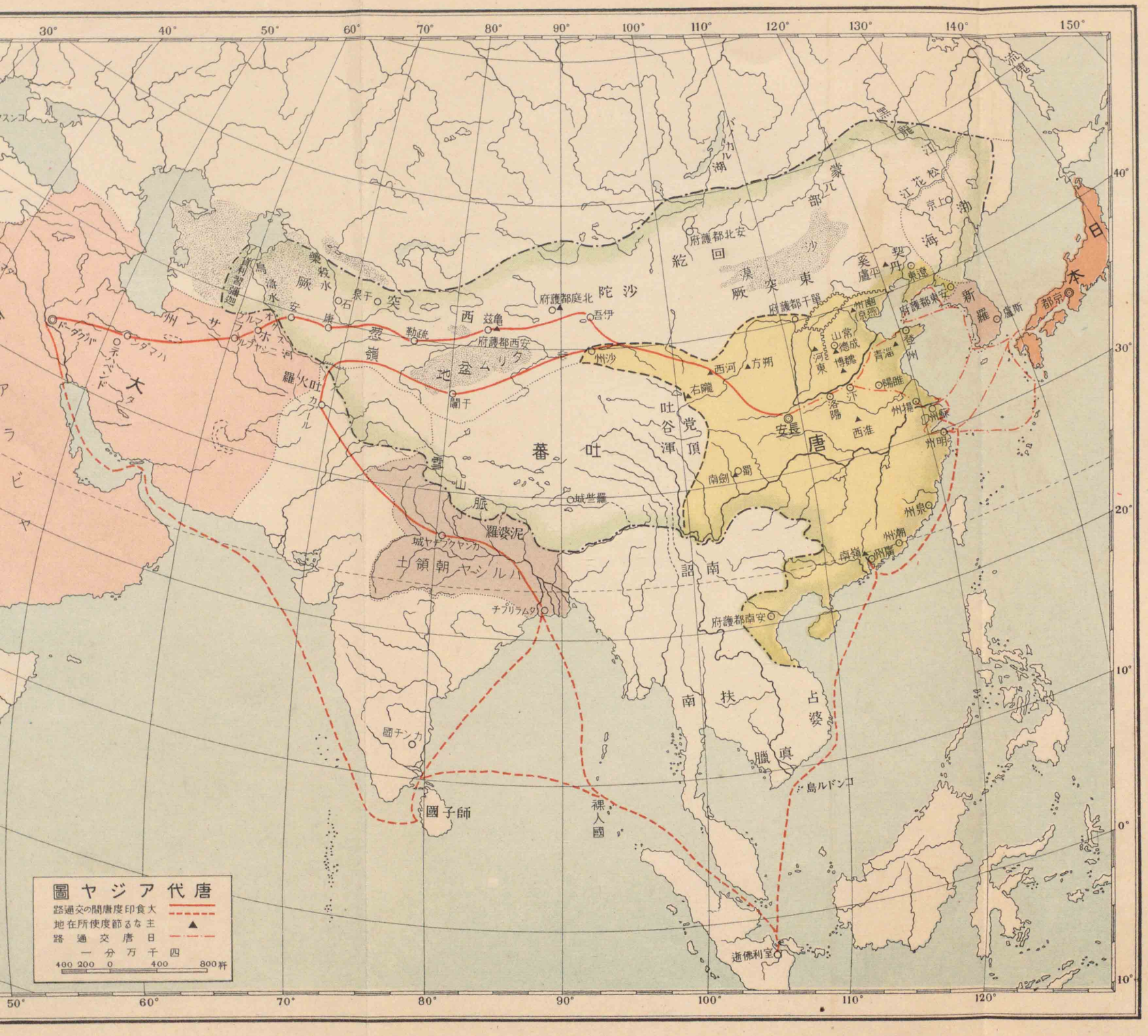
現代

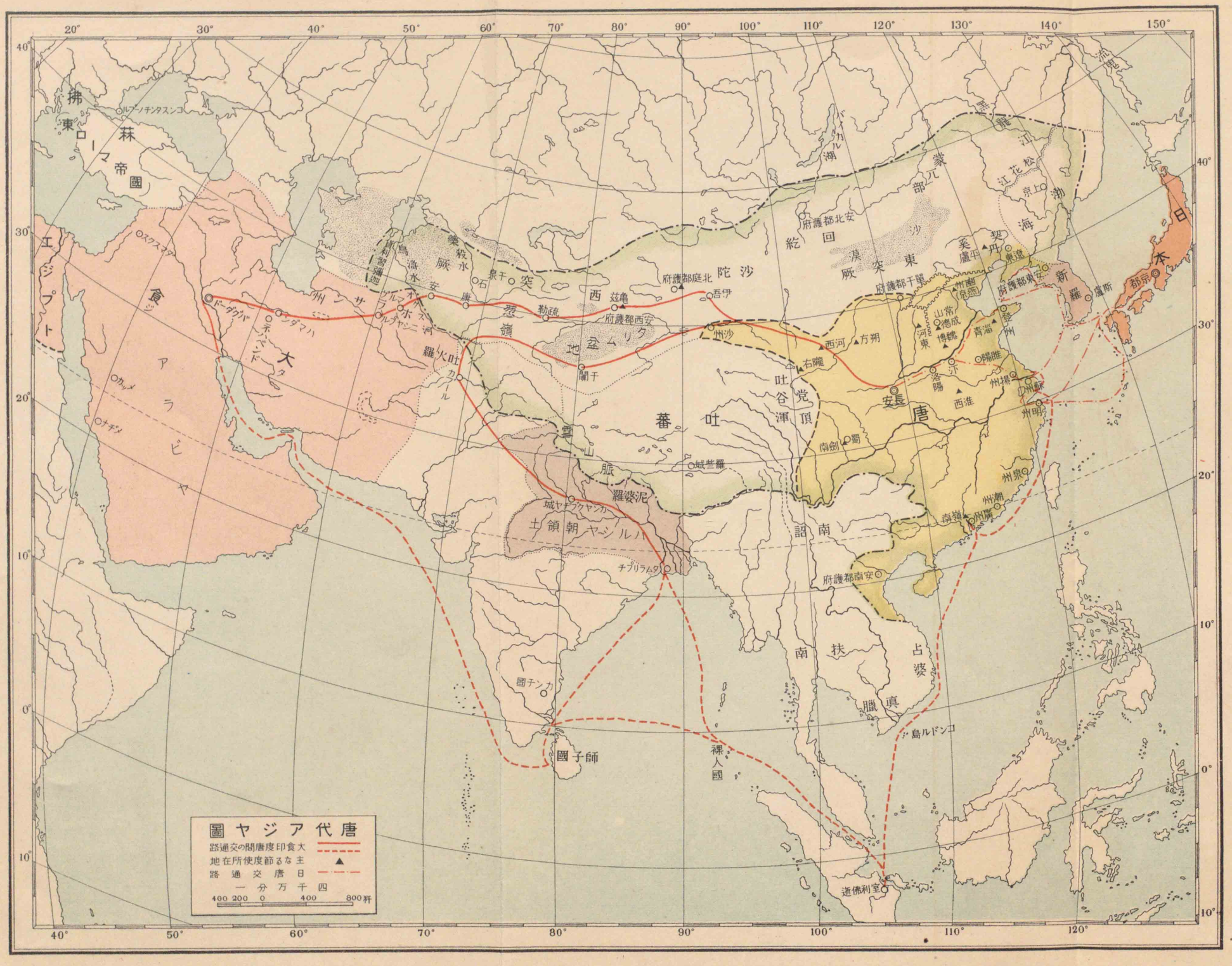
中華民國 2572—

- 二五五四（明治）　日清開戰
- 二五五五（明治）　バミール問題解決
- 二五五八（明治）　獨露英三國清の港灣を租借す
- 二五五九（明治）　佛國廣州灣を租借す。義和團の亂起る
- 二五六二（明治）　日英同盟成る
- 二五六四（明治）　日露開戰
- 二五六八（明治）　德宗及び西太后歿す
- 二五七〇（明治）　日韓の併合
- 二五七一（明治）　南支那に革命軍起る
- 二五七二（明治）　明治天皇崩御。清の滅亡
- 二五七二（明治）　中華民國起る
- 二五七三（大正）　袁世凱大總統となる
- 二五七四（大正）　世界大戰。日獨開戰
- 二五七五（大正）　日支條約成る
- 二五七六（大正）　袁世凱死し黎元洪大總統となる
- 二五七七（大正）　支那獨墺二國に宣戰す
- 二五七八（大正）　徐世昌大總統となる
- 二五八二（大正）　ワシントン會議終る
- 二五八三（大正）　曹錕大總統となる
- 二五八八（今上）　國民軍北伐完成
- 二五九〇（今上）　ロンドン海軍條約成る

漢代アジア圖
一分万千四
400 200 0 400 800粁
30°
40°
50°
60°
70°
80°
90°
100°
110°
120°
130°
140°
150°
40°
30
20°
10°
0°
大秦
海
裏
海
西
海
安息（ヤチルパ）
安息の境界へスロニーハ
安息
烏孫
大宛
月氏
大夏
康居
奄蔡
烏孫
烏壘
師車
敦煌
玉門關
泉酒
張掖
武威
地嶮咽喉交通要路
羌
氐
羌
種
身毒（印度）
ラトプリターバ（氏羅城）
摩揭陀
恒河
信度河
五河地方
北海
匈奴
河
陰山山脈
烏桓
遼東
朝鮮
樂浪
鮮卑
遼河
漢陽
雲中
平城
大原
山西
陝西
甘肅
長安
中關
洛陽
沛
昆陽
陵春
烏江
四川
蜀
雲南
益州
廣南西
廣南東
海南
交趾
安南
日南
日本
江南
大江


漢代アジア圖
四千万分一
400 200 0 400 800粁
匈奴
天山山脈
陰山山脈
安息
大月氏
大宛
烏孫
康居
奄蔡
大秦
身毒
羌
種
長安
洛陽
敦煌
玉門關
日本


唐代アジア圖
路通交の間唐度印食大
地在所使度節るな主
路通交唐日
一分万千四
400 200 0 400 800粁
日本
都京
新羅
盧斯
沸流
黑龍江
松花江
京上
沖海
蒙兀部
契丹
奚
盧平
東遼
府護都東安
府護都北安
回紇
沙漠
厥突東
府護都于單
州南京燕
山常德成
河東
博魏
青淄
登州
陽雖
州堪
州蘇
州明
洛陽
汴
西淮
唐
安長
西河
方朔
右隴
州沙
吐谷渾
党項
南劍
蜀
州泉
州潮
南嶺
州廣
城些羅
吐蕃
雪山脈
羅婆泥
城ヤルクヤンカ
土領朝ヤルハ
チブリラムタ
詔南
府護都南安
南扶
占婆
臘眞
島ルドンコ
逝佛利室
國チンカ
國子師
裸人國
府護都北庭
吾伊
府護都西安
兹龜
勒疏
于闐
突厥
西域
沙陀
砦殺水
泉于
石康
烏滸水
安
新利習蒲迦
州ンサ
ドーダヴバ
ヒルマオ
ルチヤシ河
ンダマハ
ヒンバンド
大
羅火吐
カール
ビ
ア
ラ
ア
ビ
ヤ
ア
ス
ン
コ
バイカル湖
40°
30°
20°
10°
0°
10°
50°
60°
70°
80°
90°
100°
110°
120°
130°
140°
150°


唐代アジヤ圖
路通交の間唐度印食大
地在所使度節るな主
路通交唐日
一分万千四
400 200 0 400 800粁
拂菻
東ローマ帝國
エジプト
アラビヤ
大食
ドーダグバ
ンタマハ
ルブーノチンタスンコ
カルメ
ナチメ
ホータン
ルチャン河
ウルク
烏利弾迦
渤水安
樂殺水
厥
突
泉干
石康
勒疏
西
茲亀
府護都西安
府護都庭北
吾伊
州沙
西河
方朔
右隴
闐于
吐火羅
カブール
ムリク
地盆
領朝ヤシルハ
城ヤクヤンカ
羅婆泥
城些羅
雪山脈
吐蕃
谷渾
党項
南劍
蜀
安長
唐
洛陽
汴
西淮
陽睢
州楊
州蘇
州明
州泉
州潮
州廣
南嶺
青淄
登州
河東
山常
德成
博魏
州鄭
州滑
奚
契丹
盧平
東遼
府護都東安
新羅
盧所
日本
都京
黒龍江
松花江
京上
渤海
蒙兀部
回紇
沙陀
突厥
東
府護都北安
府護都于闐
バイカル湖
流黒
詔南
府護都南安
南扶
占婆
臘眞
島ルドンコ
逝佛利室
裸人國
師子國
圖チンカ
チプリラムタ

蒙古最大版圖
四千五百万分一
大祖西征軍の路
バツ西征軍の路
マルコポーロの行路
元寇の進路
日本
京都
高麗
大都
上都
中書省
陝西
河南
四川
江浙
江西
湖廣
雲南
吐番
緬國
安南
占城
眞臘
暹國
蘇木都剌
三佛齊
渤泥
瓜哇
ベンガル
キプチャク汗國
イル汗國
チャガタイ汗國

蒙古最大版圖
一分万百五千四
400 0 400 800 粁
大祖西征の軍路
パツ西征の軍路
ローポコルマの行路
元寇の進路
伊太利王國
海
中
地
天方
ムルス國
ムズラホ國
ルイ汗國
ヤルカ汗國
ロシア汗國
白帳汗國
金帳汗國
ポーランド
ギルギス朝
ンカデ
馬八兒
藍倶
緬國
暹羅國
滿剌加
蘇木都剌
三佛齊
爪哇
渤泥
安南
占城
吐蕃
甘肅
北嶺
大都
中書省
陝西
川四
元
南河
江浙
江西
廣湖
雲南
遼陽
高麗
日本
京都
大阪
黑龍江
瓜哇

シベリヤ
アムール州
外蒙古
内蒙古
興安嶺
日本
青海
甘肅
陝西
山西
直隷
山東
江蘇
安徽
浙江
河南
湖北
湖南
江西
福建
廣東
廣西
貴州
四川
雲南
北京
緬甸
暹羅
印度支那

清朝末期の支那
四千五百万分一
160 80 0 80 160 240 320 400 粁
日本租借地
英國租借地
獨國租借地
鉄道既成線
佛國租借地
葡國租借地
鉄道起工線
同豫定線
外蒙古
内蒙古
新疆
西藏
青海
甘肅
四川
雲南
貴州
廣西
廣東
湖南
湖北
江西
福建
浙江
安徽
江蘇
河南
山東
山西
陝西
直隷
日本

昭和八年二月四日
文部省檢定濟
高等女學校歷史科用

昭和七年八月二十日印刷
昭和七年八月廿三日發行
昭和八年一月廿二日訂正再版印刷
昭和八年一月廿七日訂正再版發行

新編女子東洋史
定價 金八拾五錢

著作者 及川儀右衛門

發行兼印刷者 京都市上京區丸太町通堀川西入西丸太町百七十一番地 星野敬一

發行所 京都市上京區丸太町堀川西
電話西陣(4)三〇三五・四八三七・六〇九八番
振替口座大阪四九四九一番
星野書店

不許複製

(星野書店印刷部印刷)

三

小B

四

文庫
33
108
広島大学図書
2000082108